

言正用

方 向

九

春水一(150)　享和二年中(163)

上　書　學　(171)

頌

歌

—李長吉をめぐつて—

東　田　憲　雄

謂笑　悲愴の詩人、すなわち変風　变雅の伝統に立つ作者としての李賀を　かつて「靖談軒跋  
在時事」へ「方向」オ一写・一九五三年に説いた。けれども、かれは最初からそのようを詩人  
として出発したわけではない。正統の詩人　すなわち、盛徳を讃美してこれを宗廟に告げる頌歌  
の作者たることに　おのれの使命を見、そこにはすからず進むべき道を定めようとしていたと考  
えられる。つきにのべるいくつかの頌歌は、このことを明らかにするであろう。

上之回

上の回に之きたもうや

豈

嶺

大旗喜

懸紅雲

撻鳳尾

斂匣破

舞敗龍

豈尤死

鼓蓬蓬

天高慶雷齊墜地  
地無驚煙海千里

鼓是蓬蓬

天高く慶雷齊しく地に墜ち  
地に驚煙無く海千里

大いなる旗は喜び

紅の雲を懸け

凤の尾を撻つ

劍の匣は破れ

敗龍を舞わし己

豈尤は死し

鼓は蓬蓬

天高く慶雷齊しく地に墜ち  
地に驚煙無く海千里

天子が回中なる地、すなわちいまの甘肃省固原県境に行幸されると云うので、錦の御旗が喜々として、くれないの雲のようにななびき、旗竿のいたさの感風の尾が、ひうひうとはためく。しかし、皇帝瑞頃のもつていた瘦影の剣は、箱をやぶって空中にのぼり、皇帝をみちびいたといふが、いま同じく天子の御剣が箱をやぶり、敗龍を舞わせる。かくて、皇帝に敵討した豈尤にも比すべき完璧な匈奴は敗北し、わが軍鼓はとうとうと鳴りひびく。天は高く晴れ、万雷いとしく地におちて、爆竹のひびきながら、これを慶賀し、地上には、もはや一すじの烽火も見ず、千里青海波のうらうかな風光である。

詩意は、ほほこういうことてもあろうか。

「上之回」はもと漢の饑歌とよばれる軍樂十八曲の一つである。

上之回 中する所 益十

所中益 夏將至

行將北 行は將に北せんとするに

以承甘采官寒暑德 以て甘采官の寒暑の徳を承く

游石闕 石闕に遊び

望諸國 諸國を望む

月支は臣となり

匈奴服 匈奴は服す

今從百官疾駆馳 徒える百官をして疾く駆馳せしもれば

千秋萬歲樂無極 千秋万歳 樂し又極まり無し

前漢十七代の武帝開徵の元封四年前一。セ匈奴が蕭闕から侵入し、彭陽に至って、安定の向中宮を焼き、その騎兵が雍なる地に出没した。冬十月、帝は雍に行幸し、その地の五つの祭場で祭をいとなみ、回十道を通じ、ついにその北の蕭闕に出た、といわれる。『上之回』は、武帝の行幸が、匈奴を追いしりそけ、中國の平和を回復したことと、たたえたうたであろう。

宋の郭茂倩の編んだ『樂府詩集』によれば、梁の簡文帝蕭纲、陳の采正見、北齊の蕭悫、隋の陳子良、唐の盧照隣、李白が、同題の詩をつくっている。それらにくらべて、李賀のものが、もとのうたの趣旨をもつとも生き生きと歌へてゐるようだ。

ところでこの詩が、単純にもとのうたを趣旨はそのままに存しておのれの好む形にうたいかえただけのものなのか、あるいは、かれの時代の何らかの事件を、武帝の回中行幸にたぐえてうたつたのか、か、実のところは、きりしない。

清の王詩は、「古詞の上之回は、回中道への行幸を指したものだが、ここにいう上之回は、天子が都に回られるのを指していくのだ」という。そうだとすれば、「上之回」は、「上の回」に之きたうやくとよもへさしとの歌をひねつて、「上の回りたまつやくとよみかえた」とになろう。詩意は、兩説において、かなり違つてくる。

清の原本礼もまた、王詩の解を襲、天上で「これは、李晟が朱泚を破つて長安を回復した」という。

唐の代には、節度使とよぶ一種の衛戍司令官を各地においた。その権力が強大となつて、しばしば朝廷に反抗した、例の有名な安禄山もその一人である。

才九代皇帝德宗李适のとき、淮西節度使の李希烈がもつとも強暴で、後に説教にむかつた顏真卿を殺したほどであった。德宗は諸方の節度使の兵を集め、淮西を討伐させた。建中四年七八三月原節度使の兵が、長安を廻ると、朝廷の待遇がわるいといって暴動をおこし、宮城に乱

入して掠奪した。このときの乱後が首領に推戴したのが、當時長安に居居していた、もとの涇  
原節度使の朱泚である。徳宗は長安の西北にあたる奉天、いまの乾県に逃げ、朱泚は大秦皇帝  
と自稱して長安に占拠し、興元元年七八四には漢という国号を設け、漢元天皇と号した。このこ  
ろ、淮西の李希烈もまた大楚という国号を立てた。情勢は唐の朝廷にとってよいよ悪化し、  
徳宗は奉天のさうに南の梁州、いまの南鄭県へ脱走しなければならなくなつた。その年の六月、  
吐蕃行營節度使の李晟の努力によつて長安が克復され、朱泚は敗死し、徳宗ははじめて遷都する  
ことができた。

陳本礼の説は、李賀の「上之回」は、このときの遷都をことほぐうただとするのである。  
もしもやうならば、貞元七年七八一に生れた李賀が、おのれの生れる九年も前の事件を、なぜ突然  
にうたい出さねばならなかつたのか。朱泚の反乱は、たしかに唐の朝廷の運命を左右するに及  
ぶ大事件であった。けれども、大事件といふ点では、安禄山の変には及ばなかつたであらう。も  
し過去の事件を、李賀がうたつたものだとすれば、「上之回」を安禄山の変にかけてしまつか  
えないはすである。陳本礼は、なにゆえ、朱泚の乱に限つたのであらうか。

清の姚文契は、元和十二年ハーフ十月、朝廷に反抗した淮西の吳元濟が官軍にやぶれ十一月  
長安で誅殺せられたときハ皇威をたたえた歎だとする。  
吳元濟は吳少誠の子で、彰義節度使吳少陽のわいである。蔡州刺史代理であつた。少陽は七命  
者をあつめていそかに反乱の時機をまつていたのだが、元和九年閏六月、事を起すべいたらすし

て死んだ。元濟は少陽の死をかくしてその軍勢を捨てた。二ヶ月ばかりして、このことから中央に知れた。十月、少陽を弔らう教使がつかわされた。元濟はこれを迎えず、かえって四方へ兵を出して、隣接する諸地方を侵しはじめた。以後たゞす討伐軍がさしむけられたが、元濟の勢は強大となり、官軍は敗退することが多くなった。十二年十月、唐隨鄧節度使の李愬が、夜半に雪をかして蔡州城をおそい。元濟をいけどりにした。李愬は、朱泚の女に功のあつた李晟の子である。十一月、吳元濟は長安にみくられた。第十一代皇帝憲宗李純はみすから興安門に出てこれをうけた。

淮西は、李希烈以来、吳少誠、吳元濟と反抗者が一ねに燃つた地で、中唐を通しての国家の病だつた。それが憲宗の治世にはじめて解決したのである。このとき、李賀の師の舊懲が、行軍司馬すなわち副司令官として従軍していた。李賀に、戰勝を慶賀する作品があつて不思議はない。「上之回」を朱泚の乱にかけるよりは、よほど自然であろう。もし姚說がみとめられるとすれば、李賀は、その賄年にいたるまで頌歌することを忘れなかつた、ということになろう。

ただ、元和十二年は、李賀には死の年である。もとより、その時が何月であつたかはつまびらかではない。李賀は平生から病弱であった。李商隱の「李長吉小伝」の臨終の記述から推察しても、すでに数カ月は病牀にあつたものと考えられる。「上之回」のように漫刺たる頌歌が、その期へ成つたとは、認めがたいのではないか。

わたくしはむしろ、この詩は中興の英主としての興をきにほって即位した憲宗の最初の業

續をたゞえ、その前途を慶祝しての作だと、考る。製作の時期は、たぶん元和二年八。李賀十七歳のことであろう。

当時 輓愈は權知国子博士で洛陽に勤務した。李賀が輿愈を訪問して詩巻をさしあげその門人となったのは、この年の夏のことであつたと推せられる。輿愈は、その正月に「元和聖德詩」を作つていろ。元和の天子すなわち憲宗の聖徳をたたえて平二十四字からなる四言の雄篇で、前半には、元年に反乱した蜀の西川節度副使劉闢の征討の事をのべ、後半には、二年正月の郊天告廟、すなわち天を祭り祖廟に告げる儀式をうたつていら。

劉闢は、西川節度使南康忠武王韋皋の下で度支副使をしていた。韋皋は二十一年在職し、その間に西川地方を全く掌中のものとしていた。永貞元年八。丑秋八月韋皋が死んだ。その後を襲うつもりで、劉闢は又すから留守職と名のつた。また部下の諸将に命じて、西川節度使の後任には劉闢をあてて頃きたいと上表させた。朝廷ではこれを許さず、十月 中書侍郎同平章事の袁滋を西川節度使に任じ、劉闢をめして給事中とした。劉闢は歎をうけず、軍隊を動かして蜀をかためたので、袁滋はかやれて任地に進もうとしない。憲宗は怒つて袁滋を吉州刺史に贬した。即位したばかりの天子にはまだ劉闢を討つことには自信がなかつた。十二月、劉闢を西川節度副使に任じ、節度使の仕事にあたらせた。これが劉闢をつけ上らせることになつた。元和元年正月、西川以外の三川をも兼領させていただきた、と要求し、許されないと軍隊を発して、東川節度使の李廉を梓州に包围した。憲宗は劉闢を討とうと思つたが、天子が軍隊を動かすことは重大な問題である。公卿にはかつたが、蜀は討つべ難い險固の地だからといへばはだ消極的である。た

だひとり、宰相の杜黄裳がいって、「劉闡は氣の小れた書生で、大したことはありません。神策軍使の高崇文におまかせになれば、必ず生けとりにいたしましょう。」高崇文はすぐれた武人で平生から実戦の準備を怠らなかつた。命をうけると二時間後には出發した。三月には桂州に進み六月には充頭闘で劉闡を擊退し、九月には長驅して成都に入った。劉闡はついに數十騎のみを従え、チベットに向けて逃げたが、高崇文の部下につかまつた。十月、その身柄が長安へ送られ、その族党は誅せられた。

韓愈の元和聖徒詩では、この事件のために、質崩の文字を巡んでほほ七百韻を費している。ついで奸天告廟の儀はうつって、英雅華潤の筆を進める。そのことごとくを引く時はさけるか、次の二句を含んで、李賀の「上之回」との関連を示すようである。

……天兵四羅　旂常炳燄……紫焰嵯峨　高巖下墜　羣星從坐　錯落侈靡……鳳皇應奏　銛翼  
自拊　赤麟黃龍　速陀結紺……躍躍欲呀　失喜嗟歎……

詩人が先進の詩人を訪問しておのれの作品互讐するのは、その人に私淑仰慕していこうからであろう。もつとも、旗艦運動の手段としてこの種の訪問が行わることはあつた。ただ、李賀は利害によつておのれの奸惡を蔽つうるような人ではなかつた。『劇談錄』の傳える段落、すなわち、元稹が李賀の名声を聞いてわざわざ訪問したのに、会ひもせぬ追いかえしたという話は、その相手が元稹であるとは疑わしいけれども、李賀の性格をよく物語つてゐる。

韓愈に対する深い懐仰したから訪問したのであろう。されば、韓愈の詩文の世に伝わるものは、断章零什にいたるまで、これにまなこをさらしていったであらう。「元和聖德詩」のようを雄辯を、かれが知らなかつたとは、どうてい考えられない。もしこの推測があやまつていなしになれば、前引の「聖德詩」中の文字と「上之回」のそれとの相似は、李賀が韓愈から受けた影響の深さを語るものであろう。近時の文学史家の指摘するようば、韓・李は師弟ではあつても、遺・大型の詩人であつた。だが、そのことは、李が韓から影響を受ることをさまたげない。この点につき、われくしはさきに「帰郷」へ（方向「サ六子」）でのへたから参照されたい。

さて、以上にのへたことによつて、「上之回」が李賀の初期の作品であつて、韓愈にならつてかれがこれから乗り出していくこうとする社会の支配者憲宗の最初の業績をたたえ、その前途を慶祝することを主な動機として成つた作品であると考えることが、おだやかだと、いえないのであらうか。

### 三 沙路曲

柳陰半眠丞相樹  
柳陰半ば眠る丞相の樹  
渢馬釘於踏沙路  
渢馬釘於として沙路を踏む

断燈遣香裏燐

燐駒啼鳴上天去

燐を断ち香を遣して 聖燈裏やかに

燐駒啼鳴して 天へ上りぬ

帝家玉龍開九關

帝前動笏移南山

帝前に笏を動かせば 南山も移す

獨里重印押千官

独り重印を垂れて 千官を押さどる

金策篆字紅屈盤

金策の篆字は 紅に屈盤す

沙路歸來聞好語

沙路を帰り来るに 好語を聞く

旱火不光天下雨

旱火 光らす 天下に雨ふる」と

唐の代に、新たに宰相に任せられると、その私第から城の東衛までの路上に沙を敷くなうやしあつたことが、「唐故事」や「國史補」に見える。その路を「沙堤」とも「沙路」ともいった。

沙路曲

は 新任の宰相をたたえるうたである。

丞相が初めて参内する道すじの並木の柳は半ば眠るようだ。とくした面もちでなびき、丞相の馬はまだ玉を釣鈴といひかせて沙路を踏んでゆく。たいまつをかかげた護衛の騎馬は、火の粉をちらし、火のにおいをたたよわせ、みどりの煙をなびかせて、殿上にいななき上る。帝宮の玉龍が、九重の門をひらき、帝のみまえに笏をとて奏上すれば、南山の重きも 移すことは大やすいであろう。ひとり丞相の腰にたれる職印は、黄金で製し、印面には、目にあさやかなくれないに、主がりくなつた篆字が見える。さて退出して沙路を帰つて来ると、辞家のあいだか

うごめらしいことばが聞かれたことだ、「あの方が宰相となられたので、もはやうちづく日でりへ似た苛酷の政治はやみに政の恩次が時雨のごとく、天下にうろおうことであらう」と。

この詩は、長吉が初めて長安に入、たとき、杜黃裳のために咏じたのだ、といふ董伯言の説を、陳本礼の「協律鈞元」はひいている。董説は、長吉に「唐兒歌しなるはめ歌があつて、原注に、『杜幽公の子』としろすとこより推測したものであろうか。幽公はすなわち外國公であつて、杜黃裳を指す。『新唐書』によれば、杜黃裳は貞元二十一年七月二十八日門下侍郎になつた。宰相とよばれるのは、このとき、かつであろう。元和二年にわかに外國公に封せられ、翌年七十歳で死んだ。董説のことくなれば『沙路曲』は李賀十五歳の作である。伝えによれば、十五歳は長吉がすでに歌謡作者として名をなしていた時である。この詩があつて不思議ではない。しかしながらをか考へべき余地はある。

姚文燮は、別の説を立てる。すなわち、元和六年に李絳が同平章事となつた。このときのことをするのだとする。その理由として、次の脚話をいく。李絳が宰相となる前に、李吉甫が天子に刑罰を重くするゝとをすすめる。于頃も同じ極旨のこととをすすめる。天子はこのことをあげて李絳の意見をきいてみた。天子は德を尊しといたします。どうして成康の道をして秦の始皇の方法にならうことがありましょう。天子は同意し、李絳を宰相とした。

詩中の「早火不光天下雨しに着服した好々といふべきであろう。李絳はこの年十一月己丑に戸

部侍郎から中書侍郎同中書門下平章事に進人でいる。

ただ同じ著服からは、元和五年九月二十九日に礼部尚書同中書門下平章事となりた權德輿に、あてはまる。翌六年二月乙巳の日、天子が宰相に政治において寛なると猛なると、いすれか是かと問うたとき、權德輿は、「秦は惨刻をもって亡び、漢は寛大をもって興った」とこたえ、天子はこの言をはなはだよみした、という。姚氏のひいた李絳のことばが何によろかしらないが、權德輿のことばとすこぶる相似し、かつ、雄のことばは李のことばに先んずるのである。

「少詔曲」を、まのあたりに沙路をゆく宰相を見ての作と考えるならば、李賀が東院郎に就任して、いた元和六年をこれにあてることとは妥帖であろうから、李絳がこれに当る。けれども權德輿は、李賀の親友の權璵の父である。元和五年十一月、李賀は河南府試に合格し、韓愈のもよおし大合格者の祝賀宴では、權德輿の宰相就任が大きな話題となっていた。その時の李賀は、次の春、礼部で行われる進士の試験に何のおそれをも感じないほど揚揚たる氣持であつた。李賀にとつては、李絳よりも權德輿の方が親しく、かつはおのれがそこに入つてゆくべき官界の中起たらる宰相に有徳の人を迎えるよういびをうたつたものと考えらる方が、より自然であろう。感せられる。

もし、とも、杜と權との場合は、秋李の場合に冬である。「柳臉半眠」の語が春の形容らしく感せられるところからすれば合はない。また、權の場合は、その子の權璵と李賀との交友が、李賀の

李賀の十五歳、永貞元年から、死の年の元和十二年までに、春に宰相として新任した人は、

章軌誼（永貞元年二月）武元衡・李吉甫（元和二年正月）李藩（同四年二月）李逢吉（同十一年二月）の五人である。章軌宣は才人ではあるが、順宗の朝に信念なく王叔文に近づき、またこれからはなれ、憲宗朝に左遷せられた人物である。李吉甫は殺刑を王張した人であり、李逢吉は陰謀で、私の好悪によつて公事を左右する人であった。李賀がかれらをたたえたとは考えられないので、武元衡はこれに反して王叔文の党の懸念にも屈せず、また、李絳と李吉甫との対立する間で中正な立場を失わない人物であった。李藩は、皇帝の用を節して民を富ませることをのべ、また、皇帝の迷信を卒直に批判しうる人物であら、河東節度使王鉢が皇帝の側近に賄賂をつかつて宰相を兼ねようとはかつたときも、詔中の「宰相」の文字を自ら筆をとつて削り、その事のなるを阻した果断な人物であった。

これら五人のうち、李賀のうなつた人物としては、武元衡と李藩とがこれに近く、「席前周易移南山」の語からすれば、武より李がこれに近いように按せられる。宰相をたたえる歌は、十七歳によりしも、進士試受験を間近に感じはじめた十九歳にかゝる方か、おだやかであるよう考えられる。

著愈に「送幽州李端公序」なる文章があつて、李藩をたたえている。この文の制作は元和四年二月以後であろうが、文中「元年今相國李公、吏部員外郎なりしが、企寄て與に廟を階にしきし」とある語が見える。されば、元和四年十一月に著愈の母子であつた李賀は、師から李藩の人物について聞くところがあつた、ではない。

なお、姚文燮は李賀の「馬詩」其十四「否核精羅新、盤龍蹙鎧鮮、迴首南陌上、誰道不逢春」

を、李藩が宰相に擢んでられ、天子の榮寵に遇つたことを羨んでの作だといつてゐる。だが、「馬詩」は李賀が譲主件によつて道士の試につくことを阻まれた元和五年冬以後の作と見るべきであつて、姑説は妥当ではない。

以上の諸点を考えあわせ、「沙路曲」詩中の語にてうして、この詩のたたえる宰相は李藩と推察できるのではないかと、わたくしがおもふ。

なお、「幽閣鼓吹」には「李藩侍郎」なる人が、李賀の詩を綴つて集となしたとの話が出てゐる。この語が事實としても、いうところの李藩は大中十一年八月に礼部侍郎となつた人であつて、元和の宰相をさすへではないであらう。

キ李藩の詔書は「通鑑」によつた。「通鑑」のこの記事に妥当を欠く矣のあることを宋の昌黎の「放古編」が指摘しているが、小論の主旨にはかかるまい。

#### 四 唐兒歌

頭玉碗 碗眉刷翠

頭玉は碗碗  
眉は翠を刷く

杜郎生得真男子

杜郎は生得の真男子

骨重神寒天廟器

骨重く  
神寒くして  
天廟の器

一雙瞳人翦秋水

一雙の瞳人  
秋水を剪う

竹馬梢梢搖絲尾

竹馬は梢梢として  
絲尾を搖るがし

銀鸞暖光踏半臂

銀鸞の暖光

半臂を踏む

東家嬌娘求對值

東家の嬌娘  
對值を求むるに

淡笑畫空作唐字

淡やかに笑い  
空に畫いて 唐の字を作す

眼大心雄知所以

眼の大いにして心の雄なる 所以を知る

莫忘作歌人姓李

忘るる莫れ 歌を作りし人の姓は李なるを

ごつごつした頭、みどりをはいたような眉。杜けやは生れつき男の中の男だ。骨はふとく、氣  
盛はさっぱりして、やがて大臣にもなるべき器量だ。二つのひとみは秋の水をきら。竹馬はやや  
さやと緑の尾をトリ、袖なしを踏んで立つようにはぶしく光る銀の鸞の模様。東陵のかわいい娘  
が迷ひましよう。とやつてくると、にやりと笑って、あれの名を知らないか、とばかり、空に  
「唐」の字をかいてみせる。きみの志は大きく、きもつ玉はふといが、そいつはいかにももつと  
もだ。この歌を作つてあげたわたしの苗字が李だということを、忘れる人じやないよ。

きかん気らしい男の子のすがたか、いきいきと描き出され、末の句には、その子に微笑して対  
する作者まで目に浮ぶ。

杜黄裳は、さきにのべたように、元和三年七十歳で死んだ。『新唐書』には、黄裳に戯と勝との二子があつたことと傳えるが、たぶん、この言場ではあるまい。うたわれた子は四五歳をいい、六七歳であつたろう。七十歳の老人にこんな幼児があつたかどうかわからぬが、この詩の制作

は元和三年以前、長吉二十歳前後のことであろう。

なお、この詩題は北宋本には「唐教兒」とするが、吳正子の注に従い、又玄集ににつくる「唐

兒歌」をとった。

五

雁門太守行

黒雲壓城城欲摧  
甲光向日金鱗開  
角聲滿天秋色裏  
塞上燕脂凝夜紫  
半卷紅旗臨易水  
霜重鼓寒聲不起  
報君黃金臺上意  
提携玉龍爲君死

黒雲 城を壓し 城 指けんとす  
甲光 日に向て 金鱗 開く  
角声 天に満つ 秋色のうち  
塞上の燕脂 夜紫を凝らす  
半卷の红旗 易水、臨み  
霜重く 故 寒く 声 起たず  
君が黄金台上の意に報いんとて  
玉龍を提携し 君が為に死せん

この詩は「幽闇鼓吹」や「唐撫言」が伝える次の神話によつて、李賀の詩の中でも殊に有名な

ものである。李賀がおのれの詩集をなすり立てて、はじめて韓愈を訪問した。韓愈は外から帰ったばかりで、くたくたになっていた。帯をときをがら李賀の詩集をめくってみるに、はじめの歌がこの詩であった。おどろいて、ふたたび衣裳をつけ、李賀をよびもどして面会した。といふ。このようにもの高い詩でありながら、あるいはそのゆえに、その解釋もさまざまにわかれているが、大意は次のようなことでもあろうか。

黒い雲が城に重く垂れ、城をおしつふさんばかりである。ふと滅れ出た日の光に 将兵たちのよろいがきくきらと輝き、金の鱗がひらいたようである。角笛の声が秋色濃い天に響き、城壁の上の燕脂色の空はやがて深い衣の紫と変じ凝固する。半ばまいだ紅楓が易水にもかゝて垂れ、宿は重く鼓の音は寒く沈んだままである。黄金台を築いて國士としてまねかれた天子の恩に報いようため、太守は 玉龍の剣をひっさげて 天子のために死ぬことを辞しないのだ。

テクストの「同日」は『北宋本』には「向月」とするけれども ここには『文苑英華』に従つた。「塞上」は『北宋本』に「塞土」とするが、ここには『四部叢刊本』によつた、「鼓寒聲」は『四部叢刊本』には「鼓聲寒」とあるけれども これは『北宋本』のままでなければならぬ。

雁門は、今の山西省代県の西北の地の、古名である。中國の北部国境を守備するに重要な要塞があつた。その地の長官をたたえうたつたのが この詩である。

この詩も古い雁府の題を襲つたものだが、こんにちに存する同題の寧府の最も古いものは、晋代の瑟樂の歌詞で 継漢の洛陽の令であつた王漁の歌をたたえたものであり、雁門とはかわり

がない。李賀以前には、梁の簡文帝に二首、  
祖とするものであらうかと王珪が推している。  
簡文の作は次の通りである。

輕霜中夜下  
蔽靄遠解枝  
寒苦春難覓  
遼城秋易知  
風急旅旗斷  
塗長鎧馬瘦  
少解弦與法

家本幽并兒  
非關賣脰肉  
隴莫風恒急  
寒闌霜自濃  
煙馬夜方思  
邊衣秋未重  
渴師夜接戰  
略地曉推鋒  
悲笳動明塞

高旗出漢壘  
勤勞謝公業  
清白報迎逢  
非彌主人賞  
寧期定遠封  
鼙于如未擊  
終夜幕前跋

さて 李賀の詩について、姚文燮は 元和九年冬、振武軍が亂れたので、天子は張煦を節度使  
とし 夏州の兵二千をひきいて鎮討すべく詔を下した。振武はいにしえの雁門であるから、李賀  
はこの詩をもって張煦を勧まし送へたのだ、とする。

「幽闕跋次」や「唐摭言」の記事を信するならば この詩の製作期は 元和二年ないし四年以  
前である、て、姚燮とは合わない。

元和九年には、李賀は初秋七月、友人張煦をたよて潞州へゆき、以後三年間は、その地にど  
どまっていたようである。はたして張煦をおくるためにこの詩を詠んだのであらうか。

李賀の作で元和九年秋から同十一年にかけての作と考えられるものに「七月一日入太行山」  
「長平箭頭歌」「高平縣東私路」「酒窓張大徵索贈詩時張初始潞幕」などがある。「長平箭頭歌」  
は「深大骨末丹水砂 連淺古血生銅花 白銅金鈴而中畫 直餘三脊殘狼牙……」と戦争の悲惨をう

たゞ、「酒罷」のよう、友の功績をたたえる作において、たゞ「麗西長吉推翰客酒闌感覽中區窄葛衣断碑長城秋吟詩一夜東方白」とおのれの不遇をかこち、「病酒」に「旅酒漫愁肺癰歌曉懷絃」どうたつた李賀が、同じころに「報君黃金臺上意橫拔玉龍為君死」とうたいえたであらうか。

李賀にはもう一首雁門をうたつた作がある。「平城下」である

飢寒平城下  
夜夜守明月  
列綵無玉花  
海風斷鬢髮  
塞長連白空  
遙見漢旗紅  
青帳吹短笛  
煙靄漫畫龍  
日晚在城上  
依俙些城下  
風吹枯蓬起  
城中嘶瘦馬

平城の下に飢寒し  
夜夜明月を守る  
列綵玉光無く  
海風鬢髮を断つ  
塞長く白空に連なり  
遙かに漢旗の紅をう見る  
青帳短笛を吹く  
煙靄漫畫龍を漫し  
日晚城上に在りて  
依俙城下を望む  
風吹いて枯蓬起ち  
城中嘶瘦馬

備問幕城吏

備問十

築城の吏

去問幕千里

聞を去る

幾千里

唯愁東死歸

愁う

薨き衰みて歸るを

不惜倒戈死

惜まず

戈を倒して死するを

平城は漢代の雁門郡平城縣にある。王時はこの詩に注して「守邊の將の其の士卒を恤まざるを以て、其の下これを書く。此の辭を代作して刺る」といへ、姚文炎は「元和八年（803）冬十月、振武節度使李道質、士卒を恤ます。牙將楊道憲をして五百騎に將として東受降城に趨り、以て回部軍を備えしも。遂に亂る」という。

元和八年には李賀は、春に奉禮郎を辞し、昌谷に歸り、十月、洛陽へ出、やうに長安に赴いた。妙注のごとくなれば、長安で平城の亂を聞いて、作つたのであろうか。

「雁門太守行」と「平城下」とは、どしへすくれた作ではある。けれども「唯愁東死歸不惜倒戈死」にくらへて「兼君黃金臺上意 提振玉龍爲君死」はあまりにも直接的で、詩法として幼い。王時は「通首」一の退毛の語を作らず、沟に商妙たり」とたたえた。適評であろう。わたくしは、「雁門太守行」を、李賀が葬愈にあう以前の作とする。幽闇鼓吹論や唐無言の説が妥当であろうと考へる。<sup>①</sup> 平城下の注

雁門太守行が具体的には當時の誰をたたえしのかを、いまのわたくしが明らかにすることはできない。必ずしも特攻の個人にあてる要もつかぬう。その時代の邊境を守る武人の中には、

折がされば朝せば叛逆しようとする連は多か、たけりとも、他西史義列伝に名をあうわす人はしとより、忠誠をつくす無名者もいたのである。さればこゝへいたく亥事をかさねてなお、  
老の朝せば三百年いわたつて天下を保ちえたのである。そのような武人を頌歌の詩人かうん  
わざでおくことはないのである。

## 六

李賀の四つの頌歌を読んで来て次のことが気がつく。

天子、大臣、少年、國境守備の將軍 この四者は、由世中國の國家にとって最も重要なものであつた、これを漏らさずに入らんてうたつてゐる。いすれもすでにあらわれた功績によりも  
将来の活躍へ期待をあけるといふところに謳頌の重點があがれている。

前節まで、説明したことを要約すると、「上之回」は憲宗の最初の功蹟をたたえその前途を祝  
福して八〇七年、作つた「沙路曲」は大臣となつた李端をたたえ八〇九年、作られ、「唐兒歌」  
は唐を代表する少年の姪うしい未来をたたえ八〇九年以前に作られた、と推した。また、「雁門  
太守行」はひとりの忠貞が死に去りて國家への忠誠をつくそうとする決意をたたえ、八〇七年  
ごろ作られたと推した。

管見の及いえた資料がむちでせまいので憶測の域を出でない、ただしこれら四つの頌歌の対象が、わたくしの推した特定の四人でない、たとしても、からずもし四つの頌歌の意義は減ずることはないであろう。この四つの毎歌は特定の四人を対象としていた、ばしめられたか作者の手書きはなれんとさから、対象の特殊性をこえて普遍の徳をうたつてゐる。われわれは対象のせんざくへと勞するよりも、まず、李賀が、ほんど手になくて、ほめうたをうたつた事実に因とめておくことか必要だとおもわれる。

これら四つの詩の制作時期についても異見をさしはさむ余地はゆくあらまゝ、けれどもわたくし一寸、そのいすれも、劍の謡事件以前の、李賀にとっては初期の作品であることが信ぜられる。

韓愈は、他の人のすぐれた作品を偏見なしに見わけて賞揚することができた、たゞ、けれども世俗に通じ大人であったから、相手の才能に、世俗に迎えられう要素を見出しましない、人を世俗にするふうとは、しなかつたようである。韓愈がもし、「蘇小小墓」、「感諷」のよう作しか見てなかつたとすれば、その才能をたたえはしても、李賀を道士の詩につくようひそめたりはしなかつたであろう。

韓と李との最初の出会いは、わたくしの推定では元和二年八月である。「元和聖德詩」をつくることで頌詩への興味を高潮させていた韓愈ならばこそ、すぐれた頌詩作者の李賀に、心はずんで相見を許し、道士の詩につくことをしすすめ、李賀への謡詩をはじめに「謡弁」を草する手間をも惜しまなかつたのである。

玉

琴

常建をめぐって

原

田

憲

雄

盛唐の詩人常建の家集でわたくしの見ることを得たものは次の三本である。書名の上に○で囲んだ文字はその署号とする。

④ 常建詩集二巻 宋臨安府壇北大衛腔親坊南陳宅書籍舗刊本

⑤ 常建詩集三巻附錄一巻 明毛晋汲古閣刻唐人六集本

⑥ 常建詩一巻 清全唐詩所收

④ は中華民国二十年に故宮博物館が影印した天錄琳琅叢書第一集に収まる。上下二巻にわかれ毎半葉十行、行十八字で序跋目録はなく、卷頭卷末ともに書名は「常建詩集」とし、上巻では題下に「常建」、下巻では「常建」のふりをして「卷」の字はない。  
第二行に三字正空格として詩題をしるし、第3行から詩の本文がはじまる。上巻には三十七首

下巻には二十首、あわせて五十七首の古今体詩をみさめ。その排列の趣るところは明らかでない。上巻の最後の葉では第九行に卷末書題、第十行に小字で「蘇安府別荘臘鵠坊南隣宅印」と刊記がみえるが、下巻には刊記はない。この本は「四庫全書總目提要」には著錄しない。

『總目提要』にあげるものは、明の毛晋の汲古閣が刊した本で、「常建詩三卷」としるす。毛氏の輯めた「唐人六集」に收める事と同じ本であろうか。④は、卷之一、卷之二、卷之三の三巻に集外一巻を附録する。毎半葉九行、行二十一字。目録は「常建詩目録」と題し、卷之一に五言古詩十九首、卷之二に五言古詩十六首、卷之三に五言律詩七首、七言古詩二首、七言絕句十首。集外は「吳故宮」一首（「○」はこの詩を缺く）、計五十七首をみさめる。ただ、この本は題にはみさめる「春詞」一首を缺く。卷頭書名は「常建詩集」。その下にたちに「卷之一」と「づけ」同じ行の下部に小字で「汲古閣毛晋據宋本考叢」の十字を兩行にしるし、第二行に一字を空格として「五言古詩」と詩体を、第三行、二字を空格として詩題をしるし、第四行から詩の本文がはじまる。

『全唐詩』通行本第ニ函第十九冊には常建の詩一巻を收める。詩の排列はほほ○と同じだが、三つの相違点がある。

④の巻之三の七言古詩におさめる「古興」と「古興」との二首を、卷之二の五言古詩の最後にあたる部分に挿入しているのが、その一である。

④の巻之一の五言古詩におさめる「張公子行」を、その一へのべた「古興」の次におくのか、その二である。

②に缺ける「春詞」一首を加えるのが、その三である。

右三点と、文字の異同とから見て、また国は④を原本としてこれを考訂したもの、と考えてよいであろう。

『總目提要』は「『唐書藝文志』には『常建詩一卷』と載す。この本の三巻なれば、すなわち毛晉の汲古閣が刊するところなり」という。いすれの人の類も「これを折けしかど、知らず『書錄解題』に宋末においてなお一巻と稱すと存すよりすれば、すなわち、元、明の人の分ちしところなへん」という。『書錄解題』とは宋の陳振孫の『直齋書錄解題』である。

このいかたからみると、『總目提要』の解説者は、宋の一巻本も二巻本も、これを見きにはおよばなかつたのであろうか。

『北京圖書館善本圖目』には次の五本が見える。

常建詩集二卷 唐常建撰 宋刻本 一册 肉叔跋指

常建集二卷 唐常建撰 明銅活字印本 一册

常建集二卷 李常建撰 明銅活字印本 一册

常建詩集三卷 李常建撰 附錄一卷 明末毛氏汲古閣刻唐人六集本 傅增湘校並跋 一册 傅忠謨捐

常建詩三卷 唐常建撰 清宣統二年吳道培抄本 吳慈培校並跋 一册 傅忠謨捐

卷数からすれば、宋刻本と明銅活字印本とは④と吳氏抄本は⑤と、それで同系統の本かとも推されどが現物を見ていないので何ともいえない。

さて二巻本④と三巻本⑤とをくらべてみると、ほぼつきのことが推測される。すなわち、三巻本は二巻本の作品を詩体によって物別し、同類中で内に二巻本の排列へ従い、三巻にわたり他の選本等から見出でた「吳故宮」を集外に加えて編んだものであろう。二巻本と⑤におさめる「春詞」一首を缺くのは、納纂の過程に遅したものか。

『唐書藝文志』と『書錄解題』とに著録する一巻本は、わたくししました、これを観うことえない。けれども、二巻本と唐宋人の編んだ唐詩の選集とを対照してみると、ほぼ次のことが推測される。すなわち、二巻本の上巻が一巻本そのものであり、二巻本の下巻は、一巻本にもれて世に伝わった常建の作をあつめて、この本を刊するにあたりてつけ加えたものであろう。推測の根柢は、唐宋人の選唐詩にえらばれた常建の詩は、そのほとんど全郊か、二巻本の上巻におさめるものであることであら、下巻におさめる作が、上巻におさめるものにくらべていくじろしく劣るならば、選者の選擇が上巻に集中することもありうるけれども、現に見る下巻は、上巻に比して劣った詩のみを集めたものとは、考えられない。

以上の推測がもし許されらるならば、二巻本は常建の詩集の最も古い形を存し、さらにこれに洩れたものを網羅した家集といえよう。されば、常建の詩の世に傳せられたものは、宋代においてすでに五十七首をいでのなかったことになら、ひとりの詩人が生涯をかけての作品の叢としては

きわめて少ない。けれども存する詩に一首の駄作をも見ないとこすからすれば、常建はおのれの意へ満たない作はみずから破棄して世人の耳目に觸れさせなかつたのであろう。潔淨を愛する詩人であつたとみえる。

四四四は互いに文字の異同がある。また、三本ともに文字の下に「一本作某」と注するところがある。その「一本」が唐宋人の送唐詩なることは兩者を対照してただちに知られる。四を底本として、他の諸本によつて心をひそめて考較すれば、流傳の間にいかめられた原詩の姿を、ふる程復しにし得ることができようか。

唐宋人の送唐詩で対校しえたしのは、つきの諸本である。

唐寫本唐人送唐詩殘葉

河岳英靈集三卷 唐殷璠輯

西齋集三卷 唐洪從韋輯

又玄集三卷 唐白居易輯

文淵閣十卷 宋蜀王穀輯

新撰類林抄存卷四一卷又断簡一截

唐詩紀事八十一卷 宋劉有功撰

文苑英華一千卷 宋李昉等奉敕輯

四

唐文粹一百卷

宋魏公集

卷

五

樂府詩集一百卷 宋郭大清輯

六

三體唐詩六卷 宋周弼輯

卷

唐寫本<sup>四</sup>ないし「調集」の五は一九五八年中華書局刊「唐人選唐詩八十種」<sup>四</sup>におさめるもの<sup>二</sup>もろい、「河岳」<sup>四</sup>「國秀」<sup>四</sup>「才諭」<sup>四</sup>の三集は「四部叢刊」<sup>四</sup>におさめる原本を、「又玄真」<sup>四</sup>は「か享和三年江戸昌平坂学問所刊本」古典文学出版社影印本を、それそれ参照した。「類林抄」<sup>四</sup>は小川環樹博士の「新撰類林抄校讀記」<sup>四</sup>、中國文學叢書第十一冊によった。

「文苑英華」<sup>四</sup>は胡維新本、「唐文粹」<sup>四</sup>「樂府詩集」<sup>四</sup>は「詩叢刊」<sup>四</sup>におさめる本を「三體唐

詩」<sup>四</sup>は通行本を用いた。

「唐詩紀事」<sup>四</sup>は通行本<sup>四</sup>により、なか、俗本ではあるが、わが國では讀者が多ないので「唐詩選」<sup>四</sup>をも参照した。

「唐賢三昧集」<sup>四</sup>をも参照した。それをその略号とする。また、「唐賢三昧集」<sup>四</sup>、「唐詩別裁集」<sup>四</sup>をも参照した。底本<sup>四</sup>には目録がないので、新たに作製し、<sup>四</sup>「唐詩別裁集」<sup>四</sup>三本の排列に従って各作品ハ三通りの一連番号を付してその異同を示し、「水葉数」をしるして索引に備え、唐宋人の選唐詩に常選詩を選ぶ状況を一覽しうるようにはかった。

浅学の業である。あやまりの少なからぬことを恐れる。示教をお弱いする。

常建詩集卷上

◎◎

昭君塞

湖中曉雲

牛王將軍墓

題破山寺後禪院

宿王昌齡隱居

古意

送楚十少府

送陸耀

送李十一尉臨溪

送宇文六

江上琴興

張山人彈琴

白湖寺後溪宿雲門

閑商臥病行藥至山館初次湖亭

塞上曲

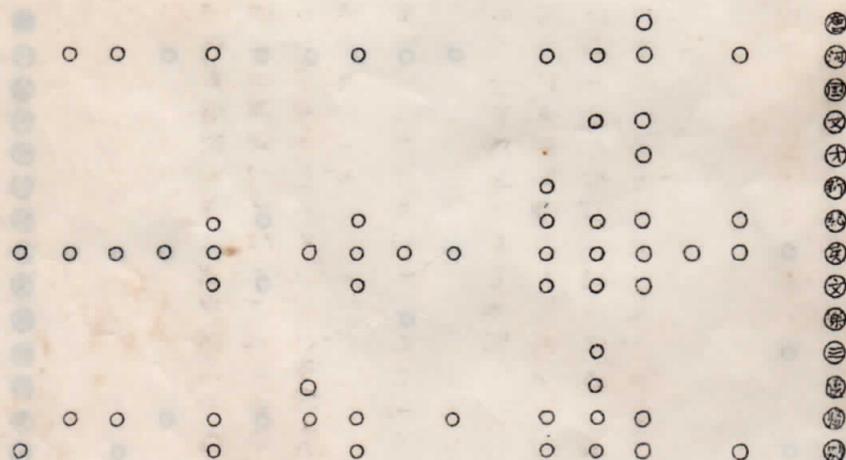
二首

4  
8

3  
8

2  
8

1  
a  
禁  
寶

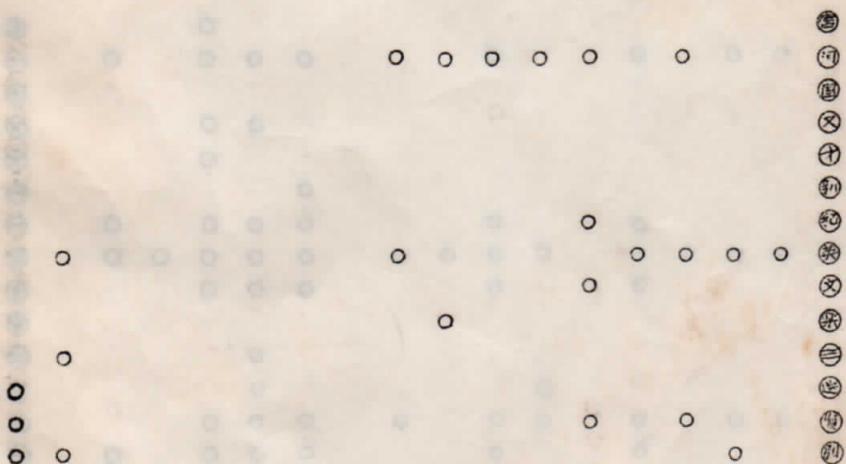


33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16

51 41 50 49 40 48 47 18 17 16 15 14 13 45 12 39 38 15  
52 44 51 50 43 41 48 17 39 16 15 14 13 38 12 42 41 15

送李大都護  
濱州留別  
仙谷遇毛女意知是秦宮人  
古興  
送大白西峯  
鄒清招王昌齡張懷  
春詞二首  
張公子行  
晦日馬燈曲稍次中流作  
洛弟長安  
塞下  
曉琴秋夜贈冠等師  
題法院  
翁猿  
泊舟盱眙  
三日尋李九莊

8 a 7 a 6 a 5 a 4 a



46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33

42 24 23 22 21 19 56 20 55 54 53 52 32  
45 24 23 22 21 20 18 57 19 56 55 54 53 32

江行 吉興 常建詩集卷上 塞下曲四首

第三峯 古意 戲題湖上

常建詩集下

宿五度路仙人得道處

西山

春詞

贈三侍御

第三峯

3  
a b

2  
a b

1  
a

8  
a  
無表

32 32 32 32 32 32 32 32 32 32 32 32 32

○ ○ ○ ○

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

◎

第  
卷

三  
七

四  
八

五  
九

六  
十

七  
一

八  
二

九  
三

十  
四

十一  
五

十二  
六

十三  
七

十四  
八

十五  
九

十六  
十

十七  
十一

十八  
十二

十九  
十三

二十  
十四

二十一  
十五

二十二  
十六

二十三  
十七

二十四  
十八

二十五  
十九

二十六  
二十

二十七  
二十一

二十八  
二十二

二十九  
二十三

三十  
二十四

三十一  
二十五

三十二  
二十六

三十三  
二十七

三十四  
二十八

三十五  
二十九

三十六  
三十

三十七  
三十一

三十八  
三十二

三十九  
三十三

四十  
三十五

四十一  
三十七

四十二  
三十九

四十三  
四十

四十四  
四十一

四十五  
四十二

四十六  
四十三

四十七  
四十四

四十八  
四十五

四十九  
四十六

五十  
四十七

五十一  
四十八

五十二  
四十九

五十三  
五十

五十四  
五十一

五十五  
五十二

五十六  
五十三

五十七  
五十四

五十八  
五十五

五十九  
五十六

六十  
五十七

六十一  
五十八

六十二  
五十九

六十三  
六十

六十四  
六十一

六十五  
六十二

六十六  
六十三

六十七  
六十四

六十八  
六十五

六十九  
六十六

七十  
六十七

七十一  
六十八

七十二  
六十九

七十三  
七十

七十四  
七十一

七十五  
七十二

七十六  
七十三

七十七  
七十四

七十八  
七十五

七十九  
七十六

八十  
七十七

八十一  
七十八

八十二  
七十九

八十三  
八〇

八十四  
八一

八十五  
八二

八十六  
八三

八十七  
八四

八十八  
八五

八十九  
八六

九十  
八七

九十一  
八八

九十二  
八九

九十三  
九〇

九十四  
九一

九十五  
九二

九十六  
九三

九十七  
九四

九十八  
九五

九十九  
九六

一百  
九七

一百一  
九八

一百二  
九九

一百三  
一〇〇

一百四  
一〇一

一百五  
一〇二

一百六  
一〇三

一百七  
一〇四

一百八  
一〇五

一百九  
一〇六

一百〇〇  
一〇七

一百〇一  
一〇八

一百〇二  
一〇九

一百〇三  
一一〇

一百〇四  
一一一

一百〇五  
一一二

一百〇六  
一一三

一百〇七  
一一四

一百〇八  
一一五

一百〇九  
一一六

一百〇一〇  
一一七

一百〇一一  
一一八

一百〇一二  
一一九

一百〇一三  
一一〇〇

一百〇一四  
一一〇一

一百〇一五  
一一〇二

一百〇一六  
一一〇三

一百〇一七  
一一〇四

一百〇一八  
一一〇五

一百〇一九  
一一〇六

一百〇一〇〇  
一一〇七

一百〇一〇一  
一一〇八

一百〇一〇二  
一一〇九

一百〇一〇三  
一一〇一〇

一百〇一〇四  
一一〇一〇一

一百〇一〇五  
一一〇一〇二

一百〇一〇六  
一一〇一〇三

一百〇一〇七  
一一〇一〇四

一百〇一〇八  
一一〇一〇五

一百〇一〇九  
一一〇一〇六

一百〇一〇一〇  
一一〇一〇七

一百〇一〇一〇一  
一一〇一〇八

一百〇一〇一〇二  
一一〇一〇九

一百〇一〇一〇三  
一一〇一　〇

一百〇一〇一〇四  
一一〇一　〇一

一百〇一〇一〇五  
一一〇一　〇二

一百〇一〇一〇六  
一一〇一　〇三

一百〇一〇一〇七  
一一〇一　〇四

一百〇一〇一〇八  
一一〇一　〇五

一百〇一〇一〇九  
一一〇一　〇六

一百〇一〇一〇一〇  
一一〇一　〇七

一百〇一〇一〇一〇一  
一一〇一　〇八

一百〇一〇一〇一〇二  
一一〇一　〇九

一百〇一〇一〇一〇三  
一一〇一　　

一百〇一〇一〇一〇四  
一一〇一　　一

一百〇一〇一〇一〇五  
一一〇一　　二

一百〇一〇一〇一〇六  
一一〇一　　三

一百〇一〇一〇一〇七  
一一〇一　　四

一百〇一〇一〇一〇八  
一一〇一　　五

一百〇一〇一〇一〇九  
一一〇一　　六

一百〇一〇一〇一〇一〇  
一一〇一　　七

一百〇一〇一〇一〇一〇一  
一一〇一　　八

一百〇一〇一〇一〇一〇二  
一一〇一　　九

一百〇一〇一〇一〇一〇三  
一一〇一　　〇

一百〇一〇一〇一〇一〇四  
一一〇一　　一

一百〇一〇一〇一〇一〇五  
一一〇一　　二

一百〇一〇一〇一〇一〇六  
一一〇一　　三

一百〇一〇一〇一〇一〇七  
一一〇一　　四

一百〇一〇一〇一〇一〇八  
一一〇一　　五

一百〇一〇一〇一〇一〇九  
一一〇一　　六

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇  
一一〇一　　七

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一  
一一〇一　　八

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇二  
一一〇一　　九

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇三  
一一〇一　　〇

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇四  
一一〇一　　一

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇五  
一一〇一　　二

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇六  
一一〇一　　三

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇七  
一一〇一　　四

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇八  
一一〇一　　五

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇九  
一一〇一　　六

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇  
一一〇一　　七

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一  
一一〇一　　八

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二  
一一〇一　　九

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三  
一一〇一　　〇

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇四  
一一〇一　　一

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇五  
一一〇一　　二

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇六  
一一〇一　　三

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇七  
一一〇一　　四

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇八  
一一〇一　　五

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇九  
一一〇一　　六

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇  
一一〇一　　七

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一  
一一〇一　　八

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二  
一一〇一　　九

一百〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三  
一一〇一　　〇

一百〇一〇一〇一〇一〇

## 常建詩集卷上

昭君墓

35

35

漢宮豈不死  
共恨丹青人異域傷獨沒  
墳上哭明月

萬里駄黃金

蛾眉爲枯骨

迴車軍一作塞

立馬皆不發

6

傷獨<sup>○</sup>作猶傷<sup>○</sup>注一作猶傷沒<sup>○</sup>作歿皆<sup>○</sup>作起<sup>7</sup>皆<sup>○</sup>作憤<sup>○</sup>注一作憤歐<sup>○</sup>作駢車<sup>○</sup>作軍<sup>○</sup>注一作軍

迴車軍一作塞

立馬皆不發

2

4

4

湖廣舟自輕

江天欲澄霽

是時清楚望

氣色猶霾晦

踟蹰金霞白

波上日初麗

煙虹

7

落鏡中樹木生天際

杳杳涯欲辨

蒙紫雲微闇

言乘星漢明

又輶寰瀛勢微興

從此

微興從此

12

愴然不知歲試歌滄浪清

遂覺乾坤細

壹念客衣薄

將期永投被

躉回漁父間

一鶯聲嘹唳

13

19

0<sup>○</sup>作韋建詩<sup>○</sup>韋建河中晚霽注一作常建詩11<sup>○</sup>乘<sup>全</sup><sub>注一作垂</sub>15<sup>○</sup>滄浪<sup>○</sup>作濃濃17<sup>○</sup>壹<sup>全</sup><sub>注一作肯</sub>19<sup>○</sup>作迴7<sup>○</sup>煙<sup>○</sup>作烟下同9<sup>○</sup>涯<sup>○</sup>注疑<sup>○</sup>作

13

3

36

36

嫖姚北伐時深入強千里

戰餘落日黃

軍敗鼓聲死

嘗聞漢羽將

可奪單于壘

今與

今與

17

山鬼鄰殘兵哭遼水

笑

0<sup>○</sup>墓<sup>○</sup>無<sup>○</sup>2<sup>○</sup>強<sup>○</sup>國<sup>○</sup>作勢<sup>○</sup>文粹<sup>○</sup>作強<sup>○</sup>國<sup>○</sup>注一作勢<sup>○</sup>5<sup>○</sup>嘗<sup>○</sup>因<sup>○</sup>作常<sup>○</sup>聞<sup>○</sup>注一作言<sup>○</sup>5<sup>○</sup>飛將<sup>○</sup>作將飛5<sup>○</sup>飛將<sup>○</sup>作將飛5<sup>○</sup>飛將<sup>○</sup>作將飛

19

題破山寺後禪院

34

37  
40

清晨入古寺  
初日朗高林  
但餘鐘磬音

3

竹逕通幽處

4

禪房花木深

5

山光悅鳥性

6

潭影空人心

7

萬籟

此都寂

但餘鐘磬音

8

○後禪院因作後院

2

朗因作明

3

竹

○作曲注一作一

4

一作曲。達作徑。通

5

一作遇

6

花作華

7

都作俱

8

作俱

○作曲注一作一

9

但餘作惟

10

聞作惟

11

一作惟聞

12

作惟聞

13

作惟聞

14

作惟聞

15

作惟聞

16

作惟聞

17

作惟聞

18

作惟聞

5  
5

清溪深不測

2

隱處唯孤雲

3

松隙露微月

4

清光猶爲君

5

茅庭宿花影

6

藥院滋苔紋

7

余亦

8

作極

9

作惟

10

作惟

11

作惟

○作極作青。測

1

清作青。

2

作極

3

作極

4

作極

5

茅

6

紋

7

作文

8

作文

9

作文

10

作文

○作極作青。影

1

作亭

2

作亭

3

作亭

4

作亭

5

茅

6

鳥

7

作鳥

8

文

9

文

10

文

○作極作青。影

1

作亭

2

作亭

3

作亭

4

作亭

5

茅

6

鳥

7

作鳥

8

文

9

文

10

文

井底玉水洞地明

2

琥珀輕瑩青絲索

3

仙人騎鳳披彩霞

4

挽上銀餅照天闕

5

黃金作身雙瓊

6

龍

7

衡明月噴芙蓉

8

一時渡海望不見

9

曉上青樓十二重

10

因送

6

送楚十少府

10

落日未能別

11

蒲黃林木虛

12

愁煙閉千里

13

仙尉其何如

14

別鶴哀有餘

15

心事則如此

16

詣君開素書

17

因送

6

微風吹霜氣

7

寒影流前除

8

別鶴哀有餘

9

經魚在金盤

10

別鶴哀有餘

11

心事則如此

12

詣君開素書

13

贈之雙鯉魚

14

經魚在金盤

15

因送

王  
269

- 0 楚國作吳 2 塞國作寒 流國作明 注一作流 7 擶國作噭  
送陸擢 0 擶國作擢 1 多國作甘注疑秀國作俊注一作秀 2 盤國作槃 7 慫國作殷  
聖代多才秀 陸生何考盤 南山高松樹 不合空摧殘 九月湖上別 北風秋雨寒 懸  
歎孤鳳 早食金琅玕 勸勤
- 1 淩國花下琴 君唱渡江吟 天際一帆影 懸離別心 3 言神仙尉 因致華音 15  
2 擶商調 趟溪澄碧林 5 仙國作儂 6 瑶國作惟 7 回國作廻下同回輪撣國作軒起官  
江國注一作頭 送字文六 2 微國作曉注一作微拔國作花
- 1 挑映垂楊漢水清 微風林裏一枝輕 郡今江北還如此 4 忆殺江南離別情  
1 垂國作隨漢水國作水微注一作漢水 2 微國作曉注一作微拔國作花
- 君去芳草綠 2 西峯彈玉琴 3 唯丘中賞 兼得清煩襟 朝從山口還 出嶺聞清音 了然  
雲霞氣 照見天北心 4 玄鶴下澄空 10 翩舞松林 改絃扣商聲 又聽飛龍吟 稍覺此身  
安 漸知仙事深 其將鍊金鼎 16 永矣投吾篋
- 2 峯國作峰下同 3 唯國作惟下同 6 清國注一作曲 7 氣國注一作意 11 和

298

166

162

15	14	13	12
10	9	8	3
10	9	8	3
行 朝 至 石 壁	江 上 調 玉 琴	江 上 簫 興	江 上 簫 興
1 作 管	一 絃 清 一 心	一 絃 清 一 心	一 絃 清 一 心
3 容 國 作 客	冷 冷 七 絃 通	冷 冷 七 絃 通	冷 冷 七 絃 通
4 虛 國 作 靈	萬 水 澄 幽 陰	萬 水 澄 幽 陰	萬 水 澄 幽 陰
5 小 陰 湖 中 花	能 使 江 月 白	能 使 江 月 白	又 令 江 水 深
時 物 堪 獨 往	始 知	始 知	始 知
春 帆 宜 別 家	7	7	7
游 君			
0 此 二 首 國 作 一 首	16 矣 國 注 一 作 以		
1 開 齋 卧 病 行 藥 至 山 館 稍 次 湖 亭 二 首	2 絃 國 作 強 國 下 同	2 絃 國 作 強 國 下 同	2 絃 國 作 強 國 下 同
1 旬 時 結 陰 霖	3 蒲 國 作 浦	3 絃 國 作 強	3 絃 國 作 強
2 箭 外 初 白 日	4 炮 國 作 窗 國 作 忘	4 炮 國 作 窗 國 作 忘	4 炮 國 作 窗 國 作 忘
3 四五 人	9 靜 國 作 晴	9 靜 國 作 晴	9 靜 國 作 晴
4 向 不 來 問 疾	23 王 國 注 一 作 去	23 王 國 注 一 作 去	23 王 國 注 一 作 去
5 東 風 變 萌 芽	1 寐 國 作 林	1 寐 國 作 林	1 寐 國 作 林
6 主 人 山 門 緣	2 策 國 作	2 策 國 作	2 策 國 作
7 小 陰 湖 中 花			

225 草 286

300

197

- 19 18 17 16  
 12 39 38 11  
 12 42 41 11  
 帶  
中  
使  
來問  
太  
原  
平  
百  
戰  
苦  
不  
歸  
刀  
頭  
怨  
明  
月  
塞  
雲  
隨  
陣  
落  
寒  
日  
旁  
城  
沒  
城  
下
- 3 山門 ④作門外 ④作門外注一作山門 ④作出門 7 斧也木作鶻 ④作向 ④作爲 8 煙  
 ④作漫 ④作涯
- 16 塞上曲  
 開  
廟  
雲  
中  
使  
來  
問  
太  
原  
平  
百  
戰  
苦  
不  
歸  
刀  
頭  
怨  
明  
月  
塞  
雲  
隨  
陣  
落  
寒  
日  
旁  
城  
沒  
城  
下
- 0 上 ④作下 2 原 ④作平 5 塞 ④作案 6 壴 ④作堠注一作旁 8 哀哀 ④作哀聲  
 望于雖不戰 都政事遷深 君執幕中被 能爲高士心 海頭近初月 碣裏多愁陰 西望
- 1 雖 ④作數 3 祕 ④作秘下同
- 0 潭州留別  
 1 賢達不相識 偶然交已深 宿帆謁郡佐 憂別依蘚林 湘水流入海 芙雲千里心 望君
- 1 溪口水石淺 淬冷明華散 入溪雙峯峻 松栝蹊幽風 垂蘿枝嫋嫋 騙紫花濛濛 黃綠  
 雷人目 路盡心猶通 盡石橫陽崖 前臨殊未窮 回潭清雲影 瀦漫長天空 水漫一神
- 14 千歲爲王童 羽毛經漢代 珠翠迷秦宮 目覩神已寓 鮑流言冰終 祗君青雪祕

- 20  
頤謁黃仙翁 嘗以耕王田 龍馮西頂中 金榜與天接 21  
0 秦官○作秦時官 4 枯園注一作捐。踈○作疎 圓作數注一作踈 5 繩○作竹 圓作竹 圓生一作  
竹 7 目圓作日 10 路○作流 注一作路 11 路○作流 圓作流 12 潑○作瀉 圓作瀉 13 潑○作瀉 圓作瀉 14 沖○作冲 圓作沖 15 沖○作冲 圓作沖 22 顶○作頤  
已 古興
- 21  
轆轤井上雙格桐 2 梵鳥銜花日將沒 3 深閨女兒莫愁年 4 王脂冷冷怨金碧 5 石榴裙裾蝶  
飛見人不語顰蛾眉 6 青絲素絲紅綠絲 7 織女錦食當爲誰  
7 素絲紅圓作紅絲雜 8 女圓作成圓注一作成
- 22  
夢太白西峯 1 夢寐昇九崖 2 布露逢元君 3 貴我太白峯 4 寥寥辭垢氣 5 結字在星漢 6 宴林聞琴瑟 7 管絃  
付餘翠 8 山鶴生片雲 9 時往浮水間 10 孤亭晝仍曠 11 松峯引天影 12 石漱清霞文 13 怡目緩舟  
趣 14 霽心投鳥羣 15 春風又指櫂 16 靈島花紛紛 17 18 19 20 21 22 23 24  
1 尕○作升 3 罫○作遺 4 罫○作零 5 罫○作零 6 罫○作零 7 罫○作零 8 罫○作零 9 罫○作零 10 罫○作零 11 罫○作零 12 罫○作零 13 罫○作零 14 罫○作零 15 罫○作零 16 罫○作零 17 罫○作零 18 罫○作零 19 罫○作零 20 罫○作零 21 罫○作零 22 罫○作零 23 罫○作零 24 罫○作零
- 23  
又北飛音書圓難聞 調居未爲歎 10 權枉何由分 11 午日逐蛟龍 12 宜爲牛冤女 13 潛覆古井
- 24  
21  
22  
23  
24

- 26  
18  
17  
夜寒宿蘆葦 晚色明西林 初日在川上  
乘游子心 秦天無纖翳 郊野浮春陰 波蘋
- 25  
17  
19  
日出乘釣舟 嫋嫋持釣竿 涉淇傍荷花  
爭嬌嬈 爲君西擊胡 胡兵漢騎相馳逐  
落日不堪聞
- 24  
16  
16  
0 ①作古意張公子 ②作公子行 ③注一作古意  
6 軸轆 ④作塵盧 10 轉 ⑤作野。西海 ⑥作海西北 ⑦作曲 ⑧注一作曲  
2 上 ⑨作土。注一作上 3 晦 ⑩作海 11 午 ⑪作五、蛇 ⑫注一作蛇  
言 15 枯槁 ⑬作祜稿 16 光 ⑭作江 20 花 ⑮注一作何
- 23  
15  
15  
1 莞莞黃柳絲 漾漾雜歌垂 日高紅妝卧  
0 ①注樂府詩集作陌上桑一本速後墻下草猶短一首共作三首 1 莞莞 ②作宛宛 3 粉 ③  
作妝 4 對 ④作樹 ⑤注一作樹光 ⑥作風 ⑦注一作風
- 1 駕駕陌上桑 南枝交北堂 美人金梯出 素手自提筐 4 ⑧作手自提竹筐 ⑨作筐  
0 樂府詩集作陌上桑 3 美人金梯出 4 ⑩注一作風
- 張公子行  
1 出乘釣舟 嫋嫋持釣竿 涉淇傍荷花 4 馬闊金鞍 5 俠客白雲中 6 腰閒懸鞚  
事嬌嬈 爲君西擊胡 胡兵漢騎相馳逐 10 轉戰孤軍西海外 11 百尺旌竿沉黑雲  
6 軸轆 ④作塵盧 10 轉 ⑤作野。西海 ⑥作海西北 ⑦作曲 ⑧注一作曲 11 黑 ⑨作墨  
2 上 ⑨作土。注一作上 3 晦 ⑩作海 11 午 ⑪作五、蛇 ⑫注一作蛇  
言 15 枯槁 ⑬作祜稿 16 光 ⑭作江 20 花 ⑮注一作何
- 春詞二百首  
20 然 溪澗花氣氤山鹿自有場 21 云  
2 上 ⑨作土。注一作上 3 晦 ⑩作海 11 午 ⑪作五、蛇 ⑫注一作蛇  
言 15 枯槁 ⑬作祜稿 16 光 ⑭作江 20 花 ⑮注一作何
- 名宦安足云 貪士任枯槁 捕魚清光漬 有時荷鉏耕  
22 橋 23 賢達亦顧羣 二賢歸去來 世上徒紛紛  
24 世 14 名 ⑨作官 ⑩注一作  
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 2210 2211 2212 2213 2214 2215 2216 2217 2218 2219 2220 2221 2222 2223 2224 2225 2226 2227 2228 2229 22210 22211 22212 22213 22214 22215 22216 22217 22218 22219 22220 22221 22222 22223 22224 22225 22226 22227 22228 22229 22230 22231 22232 22233 22234 22235 22236 22237 22238 22239 22240 22241 22242 22243 22244 22245 22246 22247 22248 22249 222410 222411 222412 222413 222414 222415 222416 222417 222418 222419 222420 222421 222422 222423 222424 222425 222426 222427 222428 222429 222430 222431 222432 222433 222434 222435 222436 222437 222438 222439 222440 222441 222442 222443 222444 222445 222446 222447 222448 222449 222450 222451 222452 222453 222454 222455 222456 222457 222458 222459 222460 222461 222462 222463 222464 222465 222466 222467 222468 222469 222470 222471 222472 222473 222474 222475 222476 222477 222478 222479 222480 222481 222482 222483 222484 222485 222486 222487 222488 222489 222490 222491 222492 222493 222494 222495 222496 222497 222498 222499 2224100 2224101 2224102 2224103 2224104 2224105 2224106 2224107 2224108 2224109 2224110 2224111 2224112 2224113 2224114 2224115 2224116 2224117 2224118 2224119 2224120 2224121 2224122 2224123 2224124 2224125 2224126 2224127 2224128 2224129 2224130 2224131 2224132 2224133 2224134 2224135 2224136 2224137 2224138 2224139 2224140 2224141 2224142 2224143 2224144 2224145 2224146 2224147 2224148 2224149 2224150 2224151 2224152 2224153 2224154 2224155 2224156 2224157 2224158 2224159 2224160 2224161 2224162 2224163 2224164 2224165 2224166 2224167 2224168 2224169 2224170 2224171 2224172 2224173 2224174 2224175 2224176 2224177 2224178 2224179 2224180 2224181 2224182 2224183 2224184 2224185 2224186 2224187 2224188 2224189 2224190 2224191 2224192 2224193 2224194 2224195 2224196 2224197 2224198 2224199 2224200 2224201 2224202 2224203 2224204 2224205 2224206 2224207 2224208 2224209 2224210 2224211 2224212 2224213 2224214 2224215 2224216 2224217 2224218 2224219 2224220 2224221 2224222 2224223 2224224 2224225 2224226 2224227 2224228 2224229 22242210 22242211 22242212 22242213 22242214 22242215 22242216 22242217 22242218 22242219 22242220 22242221 22242222 22242223 22242224 22242225 22242226 22242227 22242228 22242229 222422210 222422211 222422212 222422213 222422214 222422215 222422216 222422217 222422218 222422219 222422220 222422221 222422222 222422223 222422224 222422225 222422226 222422227 222422228 222422229 222422230 222422231 222422232 222422233 222422234 222422235 222422236 222422237 222422238 222422239 222422240 222422241 222422242 222422243 222422244 222422245 222422246 222422247 222422248 222422249 222422250 222422251 222422252 222422253 222422254 222422255 222422256 222422257 222422258 222422259 222422260 222422261 222422262 222422263 222422264 222422265 222422266 222422267 222422268 222422269 222422270 222422271 222422272 222422273 222422274 222422275 222422276 222422277 222422278 222422279 222422280 222422281 222422282 222422283 222422284 222422285 222422286 222422287 222422288 222422289 222422290 222422291 222422292 222422293 222422294 222422295 222422296 222422297 222422298 222422299 2224222100 2224222101 2224222102 2224222103 2224222104 2224222105 2224222106 2224222107 2224222108 2224222109 2224222110 2224222111 2224222112 2224222113 2224222114 2224222115 2224222116 2224222117 2224222118 2224222119 2224222120 2224222121 2224222122 2224222123 2224222124 2224222125 2224222126 2224222127 2224222128 2224222129 2224222130 2224222131 2224222132 2224222133 2224222134 2224222135 2224222136 2224222137 2224222138 2224222139 2224222140 2224222141 2224222142 2224222143 2224222144 2224222145 2224222146 2224222147 2224222148 2224222149 2224222150 2224222151 2224222152 2224222153 2224222154 2224222155 2224222156 2224222157 2224222158 2224222159 2224222160 2224222161 2224222162 2224222163 2224222164 2224222165 2224222166 2224222167 2224222168 2224222169 2224222170 2224222171 2224222172 2224222173 2224222174 2224222175 2224222176 2224222177 2224222178 2224222179 2224222180 2224222181 2224222182 2224222183 2224222184 2224222185 2224222186 2224222187 2224222188 2224222189 2224222190 2224222191 2224222192 2224222193 2224222194 2224222195 2224222196 2224222197 2224222198 2224222199 2224222200 2224222201 2224222202 2224222203 2224222204 2224222205 2224222206 2224222207 2224222208 2224222209 2224222210 2224222211 2224222212 2224222213 2224222214 2224222215 2224222216 2224222217 2224222218 2224222219 2224222220 2224222221 2224222222 2224222223 2224222224 2224222225 2224222226 2224222227 2224222228 2224222229 2224222230 2224222231 2224222232 2224222233 2224222234 2224222235 2224222236 2224222237 2224222238 2224222239 2224222240 2224222241 2224222242 2224222243 2224222244 2224222245 2224222246 2224222247 2224222248 2224222249 2224222250 2224222251 2224222252 2224222253 2224222254 2224222255 2224222256 2224222257 2224222258 2224222259 2224222260 2224222261 2224222262 2224222263 2224222264 2224222265 2224222266 2224222267 2224222268 2224222269 2224222270 2224222271 2224222272 2224222273 2224222274 2224222275 2224222276 2224222277 2224222278 2224222279 2224222280 2224222281 2224222282 2224222283 2224222284 2224222285 2224222286 2224222287 2224222288 2224222289 2224222290 2224222291 2224222292 2224222293 2224222294 2224222295 2224222296 2224222297 2224222298 2224222299 2224222300 2224222301 2224222302 2224222303 2224222304 2224222305 2224222306 2224222307 2224222308 2224222309 2224222310 2224222311 2224222312 2224222313 2224222314 2224222315 2224222316 2224222317 2224222318 2224222319 2224222320 2224222321 2224222322 2224222323 2224222324 2224222325 2224222326 2224222327 2224222328 2224222329 2224222330 2224222331 2224222332 2224222333 2224222334 2224222335 2224222336 2224222337 2224222338 2224222339 2224222340 2224222341 2224222342 2224222343 2224222344 2224222345 2224222346 2224222347 2224222348 2224222349 2224222350 2224222351 2224222352 2224222353 2224222354 2224222355 2224222356 2224222357 2224222358 2224222359 2224222360 2224222361 2224222362 2224222363 2224222364 2224222365 2224222366 2224222367 2224222368 2224222369 2224222370 2224222371 2224222372 2224222373 2224222374 2224222375 2224222376 2224222377 2224222378 2224222379 2224222380 2224222381 2224222382 2224222383 2224222384 2224222385 2224222386 2224222387 2224222388 2224222389 2224222390 2224222391 2224222392 2224222393 2224222394 2224222395 2224222396 2224222397 2224222398 2224222399 2224222400 2224222401 2224222402 2224222403 2224222404 2224222405 2224222406 2224222407 2224222408 2224222409 2224222410 2224222411 2224222412 2224222413 2224222414 2224222415 2224222416 2224222417 2224222418 2224222419 2224222420 2224222421 2224222422 2224222423 2224222424 2224222425 2224222426 2224222427 2224222428 2224222429 2224222430 2224222431 2224222432 2224222433 2224222434 2224222435 2224222436 2224222437 2224222438 2224222439 2224222440 2224222441 2224222442 2224222443 2224222444 2224222445 2224222446 2224222447 2224222448 2224222449 2224222450 2224222451 2224222452 2224222453 2224222454 2224222455 2224222456 2224222457 2224222458 2224222459 2224222460 2224222461 2224222462 2224222463 2224222464 2224222465 2224222466 2224222467 2224222468 2224222469 2224222470 2224222471 2224222472 2224222473 2224222474 2224222475 2224222476 2224222477 2224222478 2224222479 2224222480 2224222481 2224222482 2224222483 2224222484 2224222485 2224222486 2224222487 2224222488 2224222489 2224222490 2224222491 2224222492 2224222493 2224222494 2224222495 2224222496 2224222497 2224222498 2224222499 2224222500 2224222501 2224222502 2224222503 2224222504 2224222505 2224222506 2224222507 2224222508 2224222509 2224222510 2224222511 2224222512 2224222513 2224222514 2224222515 2224222516 2224222517 2224222518 2224222519 2224222520 2224222521 2224222522 2224222523 2224222524 2224222525 2224222526 2224222527 2224222528 2224222529 2224222530 2224222531 2224222532 2224222533 2224222534 2224222535 2224222536 2224222537 2224222538 2224222539 2224222540 2224222541 2224222542 2224222543 2224222544 2224222545 2224222546 2224222547 2224222548 2224222549 2224222550 2224222551 2224222552 2224222553 2224222554 2224222555 2224222556 2224222557 2224222558 2224222559 2224222560 2224222561 2224222562 2224222563 2224222564 2224222565 2224222566 2224222567 2224222568 2224222569 2224222570 2224222571 2224222572 2224222573 2224222574 2224222575 2224222576 2224222577 2224222578 2224222579 2224222580 2224222581 2224222582 2224222583 2224222584 2224222585 2224222586 2224222587 2224222588 2224222589 2224222590 2224222591 2224222592 2224222593 2224222594 2224222595 2224222596 2224222597 2224222598 2224222599 2224222600 2224222601 2224222602 2224222603 2224222604 2224222605 2224222606 2224222607 2224222608 2224222609 2224222610 2224222611 2224222612 2224222613 2224222614 2224222615 2224222616 2224222617 2224222618 2224222619 2224222620 2224222621 2224222622 2224222623 2224222624 2224222625 2224222626 2224222627 2224222628 2224222629 2224222630 2224222631 2224222632 2224222633 2224222634 2224222635 2224222636 2224222637 2224222638 2224222639 2224222640 2224222641 2224222642 2224222643 2224222644 2224222645 2224222646 2224222647 2224222648 2224222649 2224222650 2224222651 2224222652 2224222653 2224222654 2224222655 2224222656 2224222657 2224222658 2224222659 2224222660 2224222661 2224222662 2224222663 2224222664 2224222665 2224222666 2224222667 2224222668 2224222669 2224222670 2224222671 2224222672 2224222673 2224222674 2224222675 2224222676 2224222677 2224222678 2224222679 2224222680 2224222681 2224222682 2224222683 2224222684 2224222685 2224222686 2224222687 2224222688 2224222689 2224222690 2224222691 2224222692 2224222693 2224222694 2224222695 2224222696 2224222697 2224222698 2224222699 2224222700 2224222701 2224222702 2224222703 2224222704 2224222705 2224222706 2224222707 2224222708 2224222709 2224222710 2224222711 2224222712 2224222713 2224222714 2224222715 2224222716 2224222717 2224222718 2224222719 2224222720 2224222721 2224222722 2224222723 2224222724 2224222725 2224222726 2224222727 2224222728 2224222729 2224222730 2224222731 2224222732 2224222733 2224222734 2224222735 2224222736 2224222737 2224222738 2224222739 2224222740 2224222741 2224222742 2224222743 2224222744 2224222745 2224222746 2224222747 2224222748 2224222749 2224222750 2224222751 2224222752 2224222753 2224222754 2224222755 2224222756 2224222757 2224222758 2224222759 2224222760 2224222761 2224222762 2224222763 2224222764 2224222765 2224222766 2224222767 2224222768 2224222769 2224222770 2224222771 2224222772 2224222773 2224222774 2224222775 2224222776 2224222777 2224222778 2224222779 2224222780 2224222781 2224222782 2224222783 22

廬釣魚 舟小綠水深 出浦見千里

<sup>10</sup> 暝然諧遠年 扣船應漁父

因唱滄浪吟

3 川<sup>11</sup>作江 5 秦<sup>12</sup>作晴<sup>13</sup>注一作晴 11 舶<sup>14</sup>作船 12 因<sup>15</sup>注一作同

<sup>10</sup> 搭第長安

家園好在尚留秦

<sup>2</sup> 驻作明時失路人

恐逢故里鶯花笑

且向長安度一春

<sup>1</sup> 在尚<sup>16</sup>注一作住上

<sup>10</sup> 塞下

鐵馬胡裘出漢營

<sup>2</sup> 分麾面這救龍城

左甯未道兵等折

過在將軍不在兵

<sup>3</sup> 連坎<sup>17</sup>注一作斬旌

<sup>10</sup> 聽琴秋夜贈冠草師

琴當秋夜聽

<sup>2</sup> 况是洞中人

一指指忘法

<sup>4</sup> 一聲聲爽神

<sup>5</sup> 寒山弱砌默

<sup>6</sup> 漫吹寒燈頻

鐘期耳高閣自可親

<sup>10</sup> 題法院

勝景門闢對遠山

<sup>2</sup> 竹深松老半含煙

<sup>3</sup> 皓月殿中三度磬

<sup>4</sup> 水精宮裏一僧禪

<sup>1</sup> 開<sup>18</sup>作闢<sup>19</sup>注一作開

<sup>3</sup> 磬<sup>20</sup>注一作素<sup>21</sup>注一作故

<sup>4</sup> 精<sup>22</sup>注一作素

<sup>5</sup> 磬<sup>23</sup>注一作素

<sup>7</sup> 何必

<sup>1</sup> 杏杏衰衰清且切

<sup>2</sup> 鸞鶴飛處又斜陽

<sup>3</sup> 相思窗上相思淚

不到三聲含斷腸

<sup>1</sup> 杏杏衰衰之哀<sup>24</sup>注一作凄、衰衰<sup>25</sup>注一作凄凄一作依依

<sup>10</sup> 泊舟盱眙

32

41  
44泊舟晦水次  
霜降夕流清夜久潮侵岸  
天寒月近城平沙依鴈宿  
候鶯醞雜鳴雲霄外  
誰堪露旅情

鄉國

○<sup>④</sup><sup>⑤</sup>作韋建作一泊<sup>④</sup>作維。晦<sup>④</sup>作淮  
署<sup>④</sup>作羈  
過一作音<sup>④</sup>通詣<sup>④</sup>

三日尋李九莊

33  
51  
52雨歇楊林東渡頭  
永和三日盪輕舟

故人家在桃花岸

直到門前溪水流

塞下曲四首

37 36 35 34

55 54 53 52  
56 55 54 53

1玉帛朝回望帝鄉  
北風陰雨動地來  
龍關雖雄勢已分  
因嫌望子处在邊

2<sup>集</sup><sup>④</sup>作聖

鳥孫歸去不稱王  
明君祠上望龍堆  
山崩鬼哭恨將軍  
蛾眉萬古笑胡天

3天沉靜處無征戰  
腦鬚皆是長城卒  
黃河直北千餘里  
漢家此去三千里

4安氣消爲日月光  
暮沙場飛作灰  
亮氣蒼茫成黑雲  
青燐當無草木煙

常建詩集卷上

麻安府湖北大衛陸競坊南陳宅刊印

38

20  
19

五度谿上花  
生根依兩崖  
二人尋片雲  
願宿秦人家

上見懸壘崩  
下見白水湍  
寥寥唯林巒  
前溪遇新月

仙人

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

319

320

321

322

323

324

325

春詞

階下草猶短  
牆頭梨花白

織女高樓上

停板顧行客

問君在何處

青鳥舒錦翻

22 贈三侍御

高山臨大澤  
正月蘆花乾

陽色薰兩崖  
不改青松寒

士質守孤貞  
古來皆共題

明君

古身視天涯  
孤鶴在林

43 42

22 21

錯甚才  
臺上養三鳩

舞雪明  
星與江海寬

11 安能窮波濶  
12 素身視天涯

13 孤鶴在林

14 一枝非所安  
15 逐翩空絕音

16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

明君

20 赫  
21 呸躍同所歡  
22 誰念獨枯槁  
23 四十長江干  
24 青霜貴知已  
25 折翼悲高風  
26 告飢

27 晓  
28 天空何漫漫  
29 托身未可知  
30 謂  
31 道庶不刊  
32 吟彼喬木詩

4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

第三章

7 甚 8 國注一作任  
19 飛 國注作非

44 43

23 23

10 10  
11 11  
12 12  
13 13  
14 14  
15 15  
16 16  
17 17  
18 18  
19 19  
20 20  
21 21  
22 22  
23 23  
24 24  
25 25  
26 26  
27 27  
28 28  
29 29  
30 30  
31 31  
32 32

西山斧三頂  
茅宇依雙松  
杳杳欲至天  
雲梯昇幾重  
5 萬嶺玉壺  
以求鶴蹤  
6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

漢上逢老翁  
古興

江口爲匱死  
白髮沾黃泥

邊嚴寒烏鵲  
機巧自此忘

精魄今何之  
風吹

4 畏 5 國注作升  
6 古興

7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

鈞羊折<sup>1</sup>魚躍安能覩<sup>2</sup>  
 14白水明汀洲<sup>3</sup>漁浦冒深波<sup>4</sup>唯留扁舟影<sup>5</sup>  
 15繫在長江湄<sup>6</sup>突兀枯松  
 16枝<sup>7</sup>悲揚女<sup>8</sup>蠟絲<sup>9</sup>託身歸<sup>10</sup>依生死焉相知<sup>11</sup>  
 17偏觀今時人<sup>12</sup>舉世皆爾爲將軍死重圍  
 漢辛猶爭馳<sup>13</sup>百馬同一首<sup>14</sup>萬輪同一規<sup>15</sup>名與身熟親<sup>16</sup>君子宜固恩  
 17偏用作偏<sup>17</sup>江行<sup>18</sup>  
 平湖四無際<sup>19</sup>此夜泛孤舟<sup>20</sup>明月異方意<sup>21</sup>吳歌今暮愁<sup>22</sup>  
 25青苔常滿路<sup>23</sup>流水復入林<sup>24</sup>遼東市朝隔<sup>25</sup>鄉園碧雲外<sup>26</sup>  
 42無歸信<sup>27</sup>傷心看斗牛<sup>28</sup>日間鶴犬深<sup>29</sup>元零涕江頭<sup>30</sup>  
 45轉無故<sup>31</sup>不知成陸沉<sup>32</sup>寥寂丘中想<sup>33</sup>萬里<sup>34</sup>  
 17偏用作偏<sup>35</sup>高樓夜彈琴<sup>36</sup>日間鶴犬深<sup>37</sup>嘯歌今暮愁<sup>38</sup>  
 17偏用作偏<sup>39</sup>高崖百餘尺<sup>40</sup>直上江水平<sup>41</sup>明月照人苦<sup>42</sup>鄉園碧雲外<sup>43</sup>  
 由未終<sup>44</sup>東峯雲半生<sup>45</sup>開簾薄玉第<sup>46</sup>山高猿狹急<sup>47</sup>天靜鴻傷鳴<sup>48</sup>  
 6偏用作偏<sup>49</sup>客有自燕而歸哀其老而贈之<sup>50</sup>移葬雙陵前<sup>51</sup>幽願從此畢<sup>52</sup>劍心因棲全<sup>53</sup>  
 嵩馬朝自燕<sup>54</sup>一身爲二連<sup>55</sup>憶規拜孤塚<sup>56</sup>孟冬<sup>57</sup>  
 寒氣盛<sup>58</sup>撫書告言旋<sup>59</sup>碣石海北門<sup>60</sup>餘冠唯朝辭<sup>61</sup>一寒駕<sup>62</sup>娟娟馳白天<sup>63</sup>  
 取<sup>14</sup>況爲士卒先<sup>15</sup>寸心漁陽興<sup>16</sup>落日旌竿颺<sup>17</sup>

4 篓 ④ 作 篓 6 銳 ④ 作 剑 10 唯 ④ 作 唯

50 白龍窟汎舟寄天台學道者

夕映翠山深 餘暉在龍窟 簾丹滄浪意 滄浪花影沒 西浮入天色 南望對雲闕 因懷  
莓苔峯 初陽濯玄髮 泉鏡兩幽映 松鶴間清越 碧海瑩子神 玉青澤人骨 忽然爲枯  
水微興遂如兀 情寂中有天 明心外無物 環迴從所汎 夜靜猶不歇 清然竟無限  
身與波上月

張天師草堂

靈溪亭清字 傍倚枯松根 花葉繞方丈 漾泉飛至門 四氣閑炎熱 兩崖改明昏 夜深  
月晝皎 亭午朝始曬 信是天人居 幽寂無喧譁 萬壑應鳴泉 諸峯接一堯 登口子  
因口田生樽 時節閑玉書 寶映飛天言 心化便無影 目精焉累煩 忽而與胥漢  
寥落空南軒

7 曹 ④ 作 貞 12 竟 ④ 作 塵 13 登口之 ④ 作 仙子口之 ④ 作 谷 14 口 ④ 作 醉 生 ④ 作  
中 17 便 ④ 作 一 19 與 ④ 作 一 作 舉  
古意三首

二妃方訪舜 离里南方懸 遠道隔江溪 独舟照歲年 不知舊愁處 氣盡呼清天 忽淡  
變楚竹 虞眉喪湘川 後人立爲廟 累世稱其賢 邇客設祠祭 孤狸來坐邊 懨古未忍  
還 猿吟徹空山

6 菁 ④ 作 青 8 眉 ④ 作 眉

53

30  
30明月照高閣  
絲女奏羃幕

歌奏臨碧雲

簫聲沸珠箔

青鸞南海

天上雙白鶴

篇里齊

54

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

翼飛<sup>3</sup> 懇求君門樂<sup>9</sup> 玉雪九重闕<sup>10</sup> 金鎖夜不開<sup>11</sup> 剛劍自無刃<sup>12</sup> 忽焉雲外來<sup>13</sup> 態深入空蕡<sup>14</sup>  
 世風無良媒<sup>15</sup> 倦紗顧牛某<sup>16</sup> 驚飛白玉臺<sup>17</sup>

楚王竟何去<sup>1</sup> 漁自留巫山<sup>2</sup> 偏使世人見<sup>3</sup> 迢迢江漢間<sup>4</sup> 駐舟春溪裏<sup>5</sup> 著願拜靈廟<sup>6</sup>  
 13 入<sup>④</sup>注一作人

見神女<sup>8</sup> 金紗鳴珮環<sup>9</sup> 闊麗絕世姿<sup>10</sup> 今人氣力微<sup>11</sup> 合笑竟不語<sup>12</sup> 化作朝雲飛<sup>13</sup>  
 14 入<sup>④</sup>注一作人

漁浦

至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 5 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 6 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 7 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 8 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 9 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 10 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 11 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 12 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 13 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 14 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 15 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 16 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 17 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 18 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 19 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 20 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 21 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 22 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 23 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 24 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 25 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 26 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 27 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 28 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 29 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 30 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 31 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 32 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 33 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 34 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 35 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 36 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 37 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 38 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 39 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 40 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 41 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 42 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 43 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 44 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 45 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

春<sup>1</sup>至百草綠<sup>2</sup> 波澤聞鵠鶴<sup>3</sup> 別家投釣翁<sup>4</sup> 今世滄浪情<sup>5</sup> 淑絳爲縕袍<sup>6</sup> 披麻爲長纓<sup>7</sup>  
 46 泡<sup>④</sup>作鮑<sup>8</sup> 怪<sup>④</sup>作怪<sup>9</sup> 閨<sup>④</sup>作潤<sup>10</sup>

背

太公哀晚遇

57

34  
34

日出渭流白文王敗獵時  
江海人臣老筋力衰  
遭陽心影無矇縕  
遇誰知四牡玉墀下  
今一作今。辟  
當建詩集下

魚翁在蘆葦釣翁在蘆葦  
逐逐天車遙天車快。  
一言爲帝師快。  
王侯掩朱門快。  
新蓋曜長達快。  
古來榮華人快。

澤無熊羆澤無熊羆  
兵馬更不獮兵馬更不獮  
君臣皆共怡君臣皆共怡  
同車至成同車至成

詔書起遺策匹馬令致辭  
快暫靈龜因韻  
兵馬更不獮因韻  
君臣皆共怡因韻

57  
58

吳故宮1  
芙蓉蕪滿水邊城2  
豈知一日終非主3  
猶自如今有怨聲4

(一九五九·四 = 一一一·一二)

常建の伝記は、きわめて簡略なものが二三存するのみである。そのうち 元の辛文房の『舊才子伝』一九五七年古典文学出版社刊本巻二にのせる記事が、ややくわしい。

建は長安の人なり。開元十五年、王昌龄と同榜にて、登科す。大晉中、盱眙の尉を授けらる。仕えて頗る意の如くならず。遂に琴酒に放浪し、太白・紫闕諸峯に往来し、肥遯の志あり。嘗て菜を仙谷中に採り、女子に遇う。遍體の毛は緑なり。自ら言う、異れ秦時の宮人なりしか。亡れて山に入り、松葉を采食す。遂に餓寒せず、と、因うて建に微旨を授くる。養うこところ常にあらず。後、鄧淳に寓し、王昌齡・張儀を招いて、同しく隱れ。當時に大名を獲たり。集一巻、今に傳う。

古に稱す「高才に實仕なし」と。誠なるかな異の言や。曩に劉蕡は文學に死し、鮑照は參軍に卒す。今、建も亦た一尉に淪めり。悲しいかな。建は屬思既に精しく、詞も亦た警絶なり。初めは通莊を發するに似、却つて野徑を尋ね百里の外、方に大道に歸す。旨遠典雅、能く惠表を論す。一倡して三歎すべきものと謂うへし。

『唐才子伝』には、作品によつておながちにその人の伝を作爲したような記事が、少くない。詩人の伝は、それによつて、作品のすがたが明らかになればいいのである。辛氏の方法は、あや

まつていろとはいえない。ただ作品によって作為した伝が、作品と齟齬するのであつてはならないはすである。辛氏の常建伝には、それがある。

さて常建の常は姓、建は名である。字は、わからぬ。その生卒年も、明らかではない。  
小川環樹博士の『唐詩概說』(昭和三十二年岩波書店所収)、唐代詩人年表に記載しては常建の生年を、士宗の景龍二年戊申とする。八と定め、卒年を、代宗の永泰元年乙巳(六五)かと推定する。しかし  
この推定が正しければ、數え年五十八歳だったわけである。この年表の詩人の生卒年は主として  
聞一多の『唐詩大系』によった、と註記せらる。常建の生卒年も聞氏の考案によるのであろう  
か。聞氏は、何に拠つて、かく推定したのであろうか。『唐書』の藝文志に、「常建、唐代の時  
の人」とするから、代宗末年をもつて、卒~~時~~にあつたのであろうか。

常建を長安の人と定めるのは、管見に入つた限りでは、唐才子伝ののみである。常建には  
詩集長安なる詩があつて、かれを長安の人とすることを證わせる。

家園は好くて在らんに尚お秦に留まるは  
明けき時に路を失そろんと作りしを  
故里の鶯と花との笑わんことを恐れて  
且<sup>は</sup>く長安に向いて一たひの春を度さん

長安の人でないがゆえに、長安に春をすゞすことを、戒諭しているのである。別に「江行」なる

詩がある。

平湖 四十七 際なく

此の夜 孤舟を 泛ぶ

明月 真方の意

時歌 客をして越えしむ

經園は 碧雲の外

兄弟は 湘江の頭ゆき

万里 謂信なし

傷心 斗牛を看る

そもそも、兄弟の住まう湘江の頭ゆきが、經園だとすれば、常建は洞庭湖南の人、ということにならう。湘江は添水とも流水ともい、二源互て、その北源は江西省萬載縣に發して西流し、南源は湖南省瀏陽縣白沙溪に發して、西流して醴陵縣で合し、雙江口で湘水に注ぐ。雙江口け、深口とも深口鎮ともいう。兄弟もまた客中の人とすれば、常建の里籍を考えることは行とんど難い。毛晉が、その續刊した『岸建詩集』の跋に、これに附れず、總目提要とくようもまた「その里貫亦た考うる無し」という。想かて書き方というべきである。

『直齋書錄解題』の「王江寧集一卷」の項に、王昌齡と同榜登科のことが見える。辛氏をはじ

顧汝の傷を我文子をひきよる遠の身をと向え十五才とす。

元馬場貞 文獻道著者卷二十九 道士考 南元十四年 道士三十一人

諸利三人

五年ではなし。

さて聞氏の推定する生年が正しければ、常建の進士登第は十九歳または二十歳であろう。落第長安はそれ以前の作である。時代はややへだたるが白居易が二十九歳で進士に登第したとき、同年の進士中最年少であつたことをほこり教つてゐる。二十歳前後の登第は当時に稀であつた。常建の登第は十九の年少ゆえにひろく傳聞すべきであるが、その話を今に聞かない。聞氏の推定には無理があらうではなかろうか。

大曆年間に肝胎縣尉へ奉つたとの辛氏の記事は向に拠つたのであらうか。ヨ直齋書錄解題凸17「常建集一卷 唐貞貞尉常建撰」としるすのみで、龍吐の幾次はのべない。

貞貞はいまの安微者の洪沢湖南のまたである。常建に「泊舟肝胎」の一詩がある。

舟を泊む 淮水の次

霞一降つて 夕流 清し

夜久しうして 湖は岸を侵し

天寒つて 月 城に近づく

平沙 翳宿へ依り

候第 鶴鳴を聽く

わたくしの見  
ことごとく十

外國は 雪霄の外

詠か 露亦の情へ 常さん

清の王鴻元等が纂した『盱眙縣志稿』光緒十七年刊本には、縣尉として常建の名をあげ、この詩を掲げる。けれども、常建にちなんだ旧蹟が縣内に見られわけでない。

この詩を『唐詩紀事』には、常建の作として引き、常建は蕭何と仲のよかつたひとだ、としらしている。『全唐詩』もまた、これを常建の作とする。唐宋人の選唐詩では『文苑英華』のなかこれを常建の作とするのである。

常建の身上に触れた記事で最も早いものは、管見では、殷瑞の『河岳英靈集』で、「今常建り亦た一尉に論じ、悲し、かな」といつのがそれである。すなわち、一縣尉にすぎなかつたことは明らかである。それか何縣であつたかは、わからぬ。陳氏著が、常建を盱眙の尉としたのは集中して『泊舟盱眙』の詩の存するによつたのであらうか。そうだとすれば、この詩が常建の作である場合には、あやまりたということにならであろう。

もし、ども、書運の詩の現に存するものは「泊舟盱眙」と「河中曉霽」との二首のみであつて、後者もまた常建集中に見える「湖中曉霽」とまゝたく同じ詩である。両首は常建の他の詩とくらべて特に作風を異にするわけでもない。

常建の字は士隱、開元、天寶間の人で、河南の令となり、『欽定全唐文』には文章一首を存する。この文章を読んでみても、両詩の作者を常・音いすれかに推する手がかりはない。常と音と

は字形が頗る相似している。しかも、ほほ同時の人である。その氏名の混同は、巻りやすいこと  
で判明した。

常建が盱眙の縣尉であつたがどうか、という点もしばらく判断を留保しておくのが穩かであるよ  
うと思われる。

常建が仕えて竟の如くてなかつたことは、「贈三侍御」<sup>43</sup>「太公哀號遇」<sup>44</sup>等によつて明らかである。  
琴酒に放浪したことは、「張山人彈琴」<sup>45</sup>「江上琴興」<sup>46</sup>等によつて、太白、紫闕諸峯に往来したこと  
は、「夢太白西峯」<sup>47</sup>等によつて、知られる。ただ、琴にいて墨、歌へたこの詩人が、酒について  
は、ほとんど語を費していなることは、心にとめておつていいであろう。仙谷中に女子に逢つた  
ことは、「仙谷遇毛女」<sup>48</sup>「意知異秦官人」<sup>49</sup>に知られる。この詩は、陶淵明の「桃花源記」に因づいた夢  
想の遊記であつて、実際的行為の世象を寫したものではない。

王昌齡との交友は、上ほどこまやかであつたよう察せられる。こへにちに存する五十七首の  
詩中、その約三分の一は、人との交わりから生れたものである。そのうち王氏に対するは、「宿王  
昌龄漫居」<sup>50</sup>「鄧堵招王昌齡」<sup>51</sup>の二首があつて、他の人のとの交わりから生れた詩以上に、常建  
の晩年の生き方にふかくつながつてゐるよう思われる。

たゞ、王氏の現存作品中には、常建の名は見えず、かれとの交友から生れたと明らかに推しう  
る作品はない。常建の王氏への友情は、杜甫の李白に対するそれのように、受けろよりも与えら  
に傾いたのであるかも知れない。もっとも、友情の深さは、必ずしも詩や尺牘の贈答の数によ  
てはかりうるものではない。ことに、今日に存する作品によつて、散佚した作品が証したであろ

毛女者、字玉美、宜丰陵山中、山谷猿鶴、至之死後，形體生毛，自言，未始宦官人也。秦廢漢亡，入山避難，遇道士  
谷春，教食於堂，遂不餓寒，身輕如燕，百七十餘年，所上古符中，有詛咒之聲云。

う境涯までも、臆断することは、寧りなるわざであろう。現に、奚貫が贈った「駿陵灘下寄常建」なる詩は、常建は必ず答えたであろうと猜せられるのに、集中にはこれを見ない。常建の集に見るかぎり、その交友の範囲は、さほどいろくなかったようである。交わった人は、かれと同じようなく低い地位の役人、あまり世に知られぬ音楽家、道士、それに隱者であつたようである。詩人の間にも、王氏のほかにはことさらに知人を求めなかつたのであろうか。かれの目は世人の目が注ぐもののかに、向けていたように感ぜられる。『四庫提要』が、李白・高適・王之涣等、当時の文壇の名流と親交のあった王昌齡を友としなかつて、そのゆかりによって一財の声誉をかちどろうとしたのは、常建の人がらによろのであり、その詩品の高いことも当然だ、としているのは、すくねた指摘であると思う。

### 三

漢宮にてし豈に死せざらんや  
異域に独り没せしを傷むなり  
萬里黄金を駆し  
蛾眉枯骨となる  
車を廻らして夜  
塞を出でんとし

馬を立てて 皆 発せず

共に恨む 舟青の人

墳上 明月に哭す

船君墓 一

漢の王昭君の墓をうたつものである。王昭君、名は嬌、昭君はその字、とも、名が昭君で字が嬌とも、いう。晉の代には、帝の、え名をさけて、王明君とよんだ。元帝の時、選ばれて宮庭に入った。元帝の後宮は甚だ多く、そのすべてが帝に見えろわけにはゆかない。似顔画をかかせて、帝はこれを見て召して、いた。官人は画工に五万をいし十万のワイロをおくって、おのれの姿を美しく描かせた。昭君は己の容貌に自信もあつて、たたひとりワイロをおくろうとしない。画工はこれをにくんでみにくく描いたため、帝に召されるときがなかつた。のち、匈奴の呼韓邪單于が入朝して美人を求めていたので、帝は昭君を守えることにした。出發にあたつて、いさつに出た。妃君を見ると、容貌は後宮隨一。舉止眞才とすくれる。元帝は甚だ悔んだが、すでに事をかえるには遅く。昭君は戎服して馬に乗り、琵琶をたずさえて、寒を出て去つた。呼韓邪の妻となつたが、その死後、繼子の雕陶莫皋にせまられ、その妻となり、ついに匈奴に死んだ。その墓の草は他とことなつて常に青かったから、青冢と称した。

漢の國の犠牲となるたこの婦人の運命は、代々の詩人の同情を上んで、さまざまに歌われた。常建の目もまたここにそそがれる。

王昭君がワイロをつかわないことは正しいことであった。正しいことが正しいこととして通る

社会をなば昭君は異域に渡ることはなかつたであらう。正しいことが正しくこととして通り難い世であつても、もしそこに、なほ数人の正しい人があれば やはり、昭君は匈奴の地に死ぬことはなかつたであらう。昭君の正しさは 正しいがゆえにその住む社会に容れられず、一人の友人なく、王へたく孤独であつた。この孤独の人には与えられたものは、その生前においてのみならず、死後にも孤独なるべき運命であつた。青塚はこれを象徴する。

單子に嫁するへ因へて 悠み 邊にあり

蛾眉 万古 胡天に葬らる

漢家 此より去ること 三千里

青塚には 常に 薄木の煙たになし

寒下曲 其四 37

孤独の人の、死後にもなお他から切りはなされた孤独なすがたは、何人もも笑せしめずにはおかぬ。だが、孤独の人の墓にむかつて涙をそそぐ人々、現におのれの隣にある孤独の人を見出しつて、これに同情するかどうか。

正しいがゆえに孤独である人は 王昭君の昔も、いまも たえない。孤独の人は、墓壇に入らねば、その孤独を、他にさせられることしないのであらう。これが、孤独者の運命である。崇建の「昭君墓」は、孤独者の運命をうたつたもの、といつてよいであらう。

劉備の北伐せし時  
深く入ること千里を重ゆ  
戰の餘 落日 黄に  
軍敗れて 鼓声 死す  
嘗て聞く 漢の飛將  
卓子の墨を奪うべしと  
今 山鬼と隣りし  
殘兵 遠水に哭す

哭王將軍墓 3

王將軍がたれであるかをいま詳かにしないか、漢の劉備校尉董去病や匈奴から飛將軍とよばれた右北平太守李廣にたぐえられろすぐれた武人である。かれの念頭にあるものは國家の勝敗と人民の安否のみだつたのであろう。その念頭に燃てるものがかれを駆って敵中千里に深く入らせた。これは尋常のわざではない。尋常でないがゆえに尋常の像将はこれを追うことができる。またあるいは妬視して、追ふともしなかつたであろう。

かれを行くてにむかえらものは戰餘の黄なる落日と、敗軍のひびかなくなつた鼓声とのみである。死後のかれに与えられるものは、祭うものもない山鬼の列と、遠水にひびかせて去つた部下の兵の哭声のみである。

龍鳳 離離 惣い已に今れ

山崩れ 鬼哭いて 將軍を恨む

黄河直北 千余里

寒氣 苍茫 黒雪を成す

塞下曲 其三

36

これらの詩にうたわれたものも、また、正しやに寺をうれら孤獨、苦難を運命ではないであろ  
うか。

古に引いた「塞下曲」は四首の連作であつて、その第一首は、次のように、王政の四邊におよ  
ぶことをうたう。

玉帛 朝より回つて 帝都を望む

烏孫 帰去して 王と称せず

天涯 静かなる処 征戰なし

兵氣消えて 日月の光となる

塞下曲 其一

34

『唐詩送』にえらばれて、知られた作である。漢代、烏孫國より來貢し その王と漢の公主と  
の結婚を求めたので、漢では江都王建の女細君を公主として、これにめあわせた。烏孫王は、以  
後ながく帰服して、又すから王と称せず、ために、國地にレ平和が将来した、という。  
第二首は、烏名戦士の暮らざるをうたう。

北海の陰風 地を動かして来る

明君祠上 龍堆を望む

肅體 尽く是れ 長城のみ  
日暮 沙場 滲ひて灰となる

寒下曲 其二

35

これまでの唐詩選にえらばれる。

さてこの兩首について、注家のひとりはいふ、「上篇には修文の美を言ひ、此の篇には獨武の非を見る」と。文化的な政策が平和をもたらし、軍事的な政策が悲惨をもたらすことを、うたつたものだとするのである。また前の詩は「豈に崇元天寶の時か」後のは「明皇晚年に意を因功に恣にす 故に此の漢あり」と。たしかに、そのようなこと心顧慮しつゝ味わいうる作である。それはそれとして、四首を一連として、もう一度、ながめてみよう。

第二首に明君すなわち王昭君にふれながら、第四首にも、ばら昭君をうたうのは、くどいではないか。そのくどさをあえてしたのは、鳥孫に嫁した公主の身上に、作者の淚がそゝがれたからではないか。文化的な政策と人々のたたえたものが生んだ平和のかげにしました。孤独な女性の犠牲があつたではないか。その犠牲の上にさすかれり平和も永続することはかたい。

上へに修文をよせおつても、君王が必ずからをでなく他を犠牲にするような政策は、本質的には文化的とはいえない。古公亶父のよろ君王の方をこそ、修文といふべきであつた。

鉄馬 胡裘 漢營を出で

百道に分麾して龜城を救わんとす

左賢 未だ道わざるに 兵斧折れたり

過は將軍にあつて 兵にあらず

塞下 28

過は將軍にあつて兵にあらず、過は天子にあつて民にあらずである。しかも天子の過によつて  
わざわいさうけるのは、天子ならぬ民である。

翩翩たり雲中の侯

来つて太袴の牛を向う

百戦に苦しみて帰らす

刀頭 明月を怨む

塞雲は陣に隨つて落ち

寒日は城に寄つて没す

城下に寡妻あり

哀哀 枯骨に哭す

塞下曲

16

官吏としてのがれの生活に伝えられるものは「不如意」の二字である。その「意」について明

らかにしるすものはないが、これらの詩が語るところを聞けば、おのれの利害によつて民の利害をおおいえないかれの性格が、上司とも、同僚とも、ないしは下僚ヒシ、請初しなかつたのである。民の苦しみを見て、遇は縣令にあり、というをばからぬ縣尉を 縣令が詰ふはすかない。

県令の民はめものを、同僚 下僚が尊貴するはずがない、たゞ我心にしたつても、それをあらわにはせめのが人情である。常連もまた孤独の人であつたにちがいない。

不如意によつて しかしながら ただちに官をすてて琴酒に放浪してもなざ、そうである。四十歳をすぎてなむ おのれの諷刺しうべき地位を求めたのであつた。

高山 大沢に懐む

正月 芦花乾きたり

陽台 兩崖に薰れども

青松の寒きを改めず

~~士賢~~にして 孤貞を守り

古来 皆 共に離みき

明君 基才を錯き

台上 三萬 離ぶ

桜は 霜雪よりも明らかに  
量は 江海よりも廣し

身をましんで 天涯を覗る  
安んぞ波瀬に宿せんや

孤鶴 枝棘にあり

一枝 安人すら所にあらず

遠翻 絶霄を望み

雲端を凌がんと欲すらを見る

層台 何ぞ其れ高き

山石 洪湍に流る

因に知る 天地に飛び

鳴躍 所敵を同しうせんことを

誰か念わん 独り枯槁するを

四十にして 長江に干むりあとは

窮を賣めて 知己を貰とび

拙に効うて 一官に従う

翮を折つて 高風に悲しみ

飢に苦しんで 朝飧を候う

湖月 大海上に映じ

天空 向き 漫漫

身を托するに所を知らず

道を譲つて 不刑を庶う

彼の喬木の詩を吟じ

一夕 常に 三歎す

ミ侍御に贈る 43

三萬を三侍御にたぐえ 孤鶴をおのれになすらえたのであらう。恥を求める直接の動機は、飢えに苦しんだにもあつたろう。腹を満たすのは、不刑の道すなわち永遠に滅びることのない道を謀ればこそであつた。だが、実は、不刑の道にかかるなりして、から、身を托するに所を知らず頭を折つて飢えに苦しむねばならぬのであつた。彼の喬木の詩とは、詩經・小雅の伐木の詩、

伐木丁丁 鳥鳴嚶嚶 出自幽谷 遷于喬木 噶其鳴矣 求其友聲 相彼鳥矣 猶求友聲 别  
伊人矣 不求友生 神之聽之 然和且平  
木を伐ろこと丁丁 鳥鳴くこと嚶々 幽谷より出で 喬木に遷る 曜として其れ鳴くは  
其の友を求むる声なり 別人や伊の人 友生を求めやらんや 神も聴く左らん 終に和らき  
且つ平かならん

をさすのである。が、また、詩經・國風周南の漢方の詩

南有喬木 不可休思 漢有游女 不可求思 漢之廣矣 不可詠思 江之永矣 不可方思  
南に喬き木あれど 休ろうべからず 漢のかわに游ふ女あり 求むべからず 江の永き  
すべかづす

さも含意して、もとみろしもの得かたさをなげくのであらう。  
かれは、自ら世に求めらばかりてなく、友にしそれをすすめて、いろ。

聖代には才の秀れたるひと多からんも  
医生のみ 向とて 売しみを賣け人や

南山の高き松の樹は

空しく捲かれ殘つべからず

九月 湖上へ別ろろに

北風そいて 秋雨 寒し

颶颶<sup>ハ</sup> 孤りなる風を歎す

早く 金の琅玕<sup>スミ</sup>を食へたまえ と

送陸擢

8

求めるものには、木は喬く、漢は広く、江は永い。

四

夜寒うして 蘆葦に宿る

曉色 西林に 明かなり

初日 川上に在リ

便ち 游子の心を澄ましむ  
秦の天には 繊霸だにもなく

郊野には 春の陰 浮ベリ

波 静かにして 鈎魚に隨い

舟 小さくして 緑水 深し

浦を出でて 千里を見る

曠然として 遠く尋めるに 謂し

船を扣いて 漁父に應じ

因へて唱う 滄浪の吟

晦日馬鎧曲 桃次中漁作

26

世に拒まれたものも、なお生命の絶えない以上は、何うかの生き方をなさねばならぬ、おのれの道をすべて、その拒みをゆるべることもあるであらう。道をすてぬものは、自然のうちにおの

れのひそかないとみなを見出すものもある。仏寺に入つて解脱をねかい 道觀にたずねて登仙を思ふものもある。世に拒まれたものが党をなして反抗することを理想として 古人の生き方にもその典型をあてはめようとする考え方もあるが、世の大勢に反抗しうるほどの人は まことに權力をもちうる人。孤独の人ではないであろう。

仏寺も道觀も、はいってみれば、やはり人間の世態であつて たぶん 孤独の人は そこに 安住の地を見出しこともかたいであろう。されば 自然以外に、この人をもかえるしのはない、尼の大丈屈原の「漁父の辭」は、孤独の人の生き方についてのべた作品の一つである。

屈原既に放たれ、江潭に遊び、沢畔に行吟し、顏色憔悴し、形容枯槁す。漁父見て之に問うていわく、子は三閭の大夫に非すや 何故に斯に至るか、と。屈原いわく 世をこそつて皆濁れろにわれ独り清めり、衆人皆醉えるにわれ独り醒む。こゝもて放たる。と。漁父いわく 聖人は物に巻帶せずして、能く世とともに推移す。世人皆濁らば、何ぞその泥を渦してその波を揚げざる。衆人皆醉わば 何ぞその糟を餌いその釀を歎らざる。何故に深く思い、高く挙げ、自ら放たしむるや。と。屈原いわく、われ聞けり 新たに沫するものは必ず冠を彈き、新たに浴するものは必ず衣を振う。と。いすくんぞよく身の察々たるをして物の汝々たるを受くる者たゞ人也。寧ろ潮流に赴いて江魚の腹中に葬られん。いすくんぞよく皓皓の白きをもて世の塵埃を蒙らんや。と。漁父 美尔として笑い 桃を鼓して去ろ。すなわち歌いていわく 滄浪の水清まば、わが縷を濯うべし 滄浪の水濁らば わが足を濯うべし、

と。ついに去って、またともに言わす。

屈原はついに汨羅の洲に沈んだ。もしかれのごとく死をそらぶことき、せぬとすれば滄浪のう人をうたつた漁父の生き方を学ぶよりほかには、常健のような孤独な人の生き方はなかつたであらう。

夕映 翠山に深く  
餘暉 龍窟に在り  
扁舟 滄浪の意  
澹澹 花影 没す  
西に浮んで 天色に入り  
南に望んで 雲闇に對す  
因て憶う 莓苔峯  
初陽に 玄髪を洗う  
泉と鱗と 兩 ツ ながら幽映し  
松と鶴と レ シ 間かばして清越  
水碧 子神に鑑やき  
玉膏 人骨を沢あす

忽然

枯木となり

微興 益に 元たらが如し

寂かなるに應すれば 中に天あり

心を明らかにすれば 外に物なし

環廻 汎ぶ所に従い

夜静かにして 猶お 駄ます

漠然 意限りなし

身と 波上の月と

白龍窟汎舟寄天台寺道者

春至て 百草綠に

阪澤 鶴鵠を聞く

家を別れて 釣翁に投す

今世 滄浪の情

紺を漚うげて 緼袍とし

麻を折つて 長纓と左す

榮譽 本眞を失す

人の 此の生を浮ふるを 怪一む

碧水 月 自ら問し

安流 浮くして平らなり

扁舟と 天際と

獨往 誰か能く名づけん

漁浦

55

湖廣くして 舟自ら輕し

江と天と 澄みつゝ雷れんどす

是の時 清らなる楚の望めの

氣色 猶お 霽ぐみ曉りぬ

踟蹰しつつ 金霞 白く

波上に 日 初めて震らなり

煙虹 鏡中に落ち

樹木 天際に生す

杳杳 涯を辨せんと欲するに

紫紫 雲復た閉せり

言に 星漢の明らかなるに乗じ

又 襄瀛の勢を覗る

微興 これより懺い

悠然 歲を知らず

試みに滄浪の清きを歌えば  
遂に乾坤の細きを覺ゆ  
豈に客衣の薄きを憇わんや  
將に水に袂を投ぜんと 聰す  
漁父の間に遡回すれば

一鶴 醒 嘸唳

湖中曉霧 2

「湖中曉霧」の詩から反射的に思いあがめるのは雀暉の「早に交趾山を發ちて太室に還らん」とするときの作である。

東林氣微白 寒鳥忽高翔 吾亦自茲去 北山歸草堂 紗冬正三五 日月遙相望 謂盡過頬上  
臘臘辨夕陽 川冰生積雪 野火出枯桑 獨往路難盡 寒陰人易傷 傷此無衣客 如何蒙雨霜  
東林氣微白にして 寒鳥忽ち高翔す 吾も亦た茲より去つて 北山なる草堂に廻らん 紗冬  
正に三五 日月遙かに相望む 肅々として頬上を過ぎ 脣々として夕陽立弁十 川冰積雪に  
生じ 黑火枯桑より出す 独往路尽き難く 寒陰人傷み易し 傷む此の無衣の客 如何ぞ雨  
霜を蒙る、

雀暉について、その転事の三四が伝えられるのみで、その行実は明らかではない。 唐詩紀

事山には開元二十六年進士に登第したことを、『本事詩』にはその翌年に没したことと、『才子伝』には薛據と親しかったことを、それぞれに記す。集中にも薛據を送る詩がありかれど開元十九年王維榜の進士であるから、崔晉もまた常建とほぼ同時の人といえよう。崔常は交渉があるかどうかはわからない。ただ両者の右によげた兩詩は相通う発想と句ともちながら、その思想においては相反し、建の詩は曙の詩を念頭におき、かつこれを批判した作とさえ推測しうるような作ではないか。相通うといふのは、不如意の人か不如意の場所を去つておのれの道の所在に歸る發想と、「淸虛過獨立、臘臘辨夕陽」、「杳杳涯欲辨、蒙蒙雲復聞」などをさす。なお崔晉には「山下晚霞」なる詩があつて、これまた矣想用語とともに常建の詩風と相通い、ここに「湖中晚霞」とそうであるように思われる。

寥寥遠天淨 路何空濛 斜光照疎雨 秋氣生白虹 雲盡山色暝 譬蕭西北風 故林驛宿處  
一葉下梧相

寥寥として遠天淨し 路何ぞ空濛たる 斜光疎雨を照らむ 秋氣白虹を生す 雲盡きて山色暝く 譬蕭たり西北風 故林宿處に歸る 一葉梧桐下る

批判するというのではなく、曙の「傷此無衣客、如何蒙雨霜」に対し、建の「豈念客衣薄、將期永投決」とうたうめをさす。不如意はともに不如意である。これに歟して、一は傷み、一は念としない、ここに徑庭を存するわけであろう。しかし、念わざる一は、豈に思わ人や、と反語を用いるこ

とによつて、念うしのをひくしとする語氣である。もとより、詩に、ことに唐詩に、不知といふの口知であり、不語とは語なることはあらためていまでもない。達の「豈念」も「念」しかあればこそ、「急」を捨てようとの意志が「豈」とけたらくのである。「傷此」とうたう素直さはない。けれども、「傷此」と訴えたいところを「豈念」とつぱねる境地は男性詩人のあり方として清爽だともいえとう。

「湖中曉霧」を一本には常建の作とすることはすでに述べた。「晦日馬鎧曲」「白龍窟」「漁浦」とならべて、その発想はほとんど化の人の作とは考え分たいほど相似てゐる。たゞ「豈念客衣薄」の語には、他の常建の作とは異質のものが感せられなくはない。

それはともあれ、常建のこれらの詩には共通して今是昨非のおもいがただよいうたう今の自由をよろこんでいるように感せられる。昨非の判断が成熟して今是の境涯が生れるまでには、しかしながらさまざまよいとためらいとを、へなければならなかつたようである。

（二九六）六二九一七一一

## 五

常建には送別・留別の詩が六首ある。五十七首しか残さぬかれいとつて、少い数ではない。

寒影 前陰に流る

落日にも未だ別るる能わす

蕭蕭として 林木虛し

愁煙 千里を閑す

仙尉 それ 何如

因つて送る 別鶴様

之に贈る 变經魚

鯉魚は金盤にあり

別鶴 哀しみ餘りあり

心事 すなれど かくめごとし

請う 君 素書を開け

送妻ナサ府

7

霜氣をふくんた風がかすかにゆらぐ。ふと氣づくと、寒々とした影が前庭へ流れていった。別れの時がせまる。たかくてに日か落ちてしまつても、まだ別れることができない。蕭々とさやぐ林の木々のむなしさ。わたしの愁いさながらに千里をとじこめる霧を、あなたはどう思うか。王莽が漢室の政権をうばつたとき、「妻ヲをすてて九江に去リ人々かつ仙尉とよばれたあの梅福のように、君はやっぱり親しいものから離れていくというのか。むかし商陵の牧子は妻をめとつたが、五年たつても子どもができぬ。牧子の父兄が、妻を離別して別の女をめとれといふ。

夜中に起きて、口ですすり泣いていた。牧子はこれを聞いてかなしみにたえず、歌をとてうたつた。そのうたを別鶴操といふ。君をおくるかなしみはまさにそれだ。『飲馬長城窟行』といふ古い樂府にこんなうたがある。「客遠方より来る。我に双鰣魚を遣る。鳬を呼びて鰣魚を烹る。中に丹素書きあり。」そのうちみに、いま、二匹の鰣をお贈りしよう。鰣は金の四へある。か別れる鶴のかなしみはあふれてる。わたしの方もいはこんなふうなのだ。鰣魚の腹中のてかえをひらいてどつかわらしいおもいを譲ってくれたまえ。

詩意はほほ右のごとくであろうか。別れをおしむ感情がこまやかにうたわれて、おくられるもののこころを別れがたさでつつむようである。唐人は總して送別の詩にたくみで、すぐれた作品が少くない。常建もさうした社會の詩人としてたくみだといえば、それまでながら、その送別の詩はたくみをこえたところで、ふかく澄んだものがあるようと思われる。

泠泠たり　花下の涙

君は唱う　渡江の吟

天際の一帆影

浦の懸く　離別の心

神仙の尉ヒ古うを以て

因つて致す瑠華の音

物を回らせて商談を據せば

溪を越して碧林漫まん

送李十一尉陪溪

9

花は垂楊に映して漢水清し  
微風林裏一枝輕し  
即今江北還た此の如し  
愁殺せん江南離別の情

送宇文六

10

草子載わすと雖も

都護辺を事とする深し

吾嘉中の秘を執つて

能く高士の心を爲す

海頭初月近し

碩衷愁陰多し

西のかたに郭猶子を望む

将に別れ人として浜漂に満つ

送李大都督

17

賢達相諱ならざりしも  
偶然交已に深し

帆を宿して 郡佐に謁し  
別れを惜んで 禅林に依る  
湘水 流れて 海に入る

芙蓉雲 千里の心

君を望む 杉松の夜

山月 猛吟 清し

澤州留別

18

人は、送ふ友に、ひひとがらをあうわし 交わりに 生き方を示すものである。常連は よほど心にかなつた人でなければ、交わることをしなかつたのであろう。その交友のせまく 知名の士の稀であつたろうことは、すでにのべた。これら相送る詩も、李大をはじめは郡県の儒僕級の人である。孤風とよび、神仙の尉とよび、高士とよぶ。いずれも、志を行なうために孤独でち ら人である。

孤独の人は、孤独の人をしか、友とするとはかたいのであろう。しかも わずかに心にかのうた人も、ついに離れて、相思いつつ住まねばならぬのが人生である。孤独の人は、離別によつてしか、その友情を保つことができないのであるのかもしれぬ、あるいは、離別によつてのみ友情をたもつことのできるような人しか、友として愛することができるないために、この人はいよいよ、孤独をおのれの性格のうちに築かねばならなかつたのであろうか。

毎時 陰霖を結びしが

簾外 初めて 白日

齋沐して病容を清め

虚室を畏る

心魄 前戸を照すに

明鏡に端質を悲しむ

同宿四五人

何とて来つて病を問わざる

行薬して 石塁に至れば

東風 前芽を夾む

主人は 山門の緑

小隱は 湖中の花

時物 独り往くに堪え

春帆 家を別るるに宣し

君に辞して 滄海に癡い

烟漫 天外に從わん

閑居臥看行薬至山館舎次湖亭ニ吉

14  
15

彼がみすから人をこはむ猶介の人でなかつたるうことは、同袍四五人 何不來同疾、の句、も、さきの相送る詩にもうかがえる。それだけに、求めらものは求す 愛する人は去つてゆくのが、人の世の常なることを、痛切に味わねばならなかつたのであろう。また、物狂おしさを内へ、いたいた人は 大江に浮ぶ春帆をみれば、そぞろに心かさまようて、愛するもののもとから去り 渦海にうかび、天外に漂泊せんには、おれないのであろう。

(一九六。七二三)

# 宝山官室口寺送まひす

六

漂泊遍歴をうたう作品は常連集中の重要な部分をしめる。その多くが 映画でも見るようになる。時間の推移につれて場景が変化し、心理が展開していく。さきにひいた「湖中晚雲」がそうである。『唐詩送』にえらはれら「西山」がそうである。ここには「白湖寺後溪宿雲門」についてややくわしく検討しよう。

白湖寺がどこにあるいかなる寺かを わたくしは知らない。安徽省廬江縣東北三十里に「白湖」という湖がある。北に排子湖 巢湖と連なり 楊鳳山 僵山かれこれに臨む。兩山から發した諸水がこれにそそぎ 西河によつて流出し 無爲州のさかいを通つて大江に入る。白湖寺の名は、あるいはこの湖名にちなむかどもおもうが、~~此~~の地方の古跡にくわしい。重修安徽通志に「も、何ら記事をみない。孟浩然に「雪門寺西六七里間符公蘭若最幽與薛八同往」、「遊雪門寺寄越府包戶

曹徐處居<sup>レ</sup>また孫遜<sup>ハ</sup>「宿雪門寺閣」の詩があち、これは浙江省紹興県南三十二里の雪門山にあら雪門寺なか<sup>レ</sup>これは白湖寺後溪の雪門てはないであらう。

落日山水清、落つる日に山し水し清うなり。

ますうたわれらのが落日である。「戰餘落日黃」<sup>3</sup>、「落日未能別」<sup>4</sup>、「湖畔落日暗」<sup>22</sup>、「邊笳落日不堪聞」<sup>25</sup>、「落日西山際」<sup>41</sup>、「落日旌竿懸」<sup>49</sup>、「拔策皆落日」<sup>56</sup>、「落日憑桑榆」<sup>57</sup>、かく常連の集には、落日がしばしばうたわれる。このほか、他の語をもって、うたうものもある。「踟蹰金霞白」<sup>波上日初麗</sup><sup>2</sup>、「寒日旁城沒」<sup>16</sup>、「日暮沙場飛作灰」<sup>35</sup>、「日入孤霞繼」<sup>41</sup>、「夕映望山深」<sup>餘暉在巖窟</sup><sup>50</sup>、「日入聞虎闘」<sup>56</sup>などかその例である。六十首にみたぬ作品しか残さぬ詩人が、かく落日をうたうことは、よほどそこに特殊な思いを注いでいたのであらう。

日入溪水靜、尋真此亦難、乃知滄州人、道成仍釣竿、源攢乘微月、振衣生早寒、紛吾成獨往  
自遠耽考槃、已息漢陰詣、且同濠上觀、喘然心無涯、誰問容膝安、  
日入りて溪水は靜かなれど、眞を尋ねれば此も亦た難し、乃ち知る滄州の人、道成りて仍ち  
釣竿す、櫓を漂わせて微月に來じ、衣を振えば早寒生す、紛として吾れ独往を成す、自ら遠  
かに考槃に耽らん、已に漢陰の詣息み、且く濠上の鶴を同じうす、曠然として心涯なし、誰  
か膝を容うるの安きを問わん

同じ時代の詩人吳賈が嚴陵淵下から常建に寄せた詩である。吳賈は、なぜこの詩を「日入り」で始めたければならなかつたのか、たとえば「日出でて」であつてはいけないのか、日の入るところにたまたまこの詩を着想したといえは、それまでのようである。だが、さらに入りて考えてみよう。吳賈はなぜ日没にこの詩に着想したのであらうか。この問いには、あるいは、吳賈もはつきりは答えられなかつたかもしだれぬ。しかし、答えは、実は、この詩にある。常建に寄せる詩だから、日の入るころに着想したのであらう。吳賈はとては、落日をうたうことか、常建をあもうことたつたのだ、といふ方が、より正確であるかもしだれぬ。

吳賈の作でいまに存するものは三首の詩と三聯の句とのみである。三首の一はさきに掲げた。三首の二は「谿谷何蕭條 日入人獨行」、「落日下平楚 孤煙生洞庭」で、これまた落日をうたう。これだけで吳賈の性格の全貌を推すことは憚られるけれども、とにかく、落日に目を向けていた詩人であることは、まちがいない。その吳賈が落日によつて常建をおもうたのは、常建が落日をうたう詩人として強く印象せられていたからではないか。

もともと同じ代の詩人が落日をうたわなかつたわけではない。たとえば李白の詩集には、「落日」の語をふくむ句が二十八五つ。その他「日落」「日入」「日没」「日暮」「日晚」などの語をふくめて、四十ないし五十は出てくる。王維は「落日」十九。その他をふくめて三十前後、杜甫では「落日」二十五、その他をふくめて七十ないし八十である。一々数えてはみなかつたが、孟浩然などにも相当あつて、總して唐の詩人は、好んで落日をうたつたようである。

落日をかく好んでうたうのは、それでは、唐代へいたつてばかりかれた現象なのであसうか。

わたくしは ここ又に、<sup>甲</sup>詩經 <sup>乙</sup>楚辭 <sup>丙</sup>全漢三国晉南北朝詩 <sup>丁</sup>について、ざーと検してみた。  
 詩經には、王風の「君子于役」に「日之夕矣 羊牛下來」・「日之夕矣 羊牛下括」と見ぞる  
 のみである。この詩集には、夜のうたわれることさえはなはだまれであつた。

<sup>乙</sup>楚辭になると「日忽其將暮」・「日將暮今帳忌歸」・「日昧昧其將暮」・懷沙の例が見  
 られる。また、当面の落日とけやへたたろけれども、落日につながる時間と意識してうたわれたと  
 も考えられる。「夕檻洲之宿華」・「夕暘次於窮石今」・「夕余至於西極」・「夕弭節今北渚」  
 湘君・夕浦今西遙」・「夕宿今帝郊」・「日今などがある。

漢以後 日没のときをうたいつ夕陽をうたうことだけ相当ふえてくう、こゝに例としてあげるのは  
 「日」の字をとしなうものにかかるが、この行かにし、そのことからをうたうもめがあうことは  
 うまたもない。なお、「胡笳十八拍」のよう、<sup>丁</sup>の製作の時、考慮を加えらへきし入し、こ  
 こでけいちかうかんがえないてよく。引いた句にそえたアラビヤ数字は、台灣藝文印書館印行の  
<sup>甲</sup>全漢三国晉南北朝詩の頁数である。

漢	日入之部	白猿王康義 53	暖暖白日引照西側	秦嘉 89	日暮風悲今邊雨	四起	登珠 107	日暮不	
	盈抱	115	日暮秋雲陰	117	晚々日欲瞑	146			
魏	稍々日零落	★ 帝 113	蹕迫日暮	同 114	日暮嗟歸蹕	通日暮	明帝 203	白日曠々忽西傾	同 205
	風飄白日	光景馳西流	齊思王	同 207	日出登東幹	既夕沒西枝	同 208	西眺觀日精	同 221
周	鶯風訊	白日忽然歸西山	同 223	白日忽西匿	同 220	日暮薄言歸	王粲 224	行々持日暮	同 226
白日忽已暝	同 226	日暮大我心	同 227	日暮歸故山	唐易 228	日暮薄言歸	同 229	灼々西墮日	同 231
								日暮送西園	同 236
									362

白日忽西幽 四 306

白日陨隔谷 四

315

晉

424

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

315

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

374

426

「日落」との語をふくむものの名をあげる。

齊 落日高城上謝朓	落日餘清陰同	日落窗中坐同	曉暖日將落同
梁 梁落登雍臺武帝	落日斜階上荀文帝	落日照橫塘同	日落長沙渚江淹
松 同	落日歌吹還瘦肩吾	暉々覩落日何遜	落日照紅棲王筠
平落日謝朓	想君愁日落同	徘徊落日晚同	落日暝圓川
王贊衡	日落應門閑劉令綱	落日懸秋浦別頭	日落庭光轉紀少瑜
	國夕落日樹後主	落日更新粧同	日落江風靜

隋 日落寶壇西 唐思述同  
日落風塵昏  
丁仲文  
1973

このほか、「擬落日窗中坐」梁荀文帝、「落日泛舟東溪」任昉、「落日登高」同、「落日前墟望贍苑  
舊州雲」何逊、「落日郡西齋望海山」荀子雲、「落日看還」鮑參などのように題として落日をかけ  
も、ばらこれをうたうるものも見えろ。

右の諸例をながめて、いふと次のよう考えにいたなれ。

その一つは、古代の人々は夕暮を意識にあげ、夕陽をうたうこととは稀であることである。かれら  
にとては、書は光明であり活動の時であり、生命であり善てあり美てあり育ててあつた。だけこれ  
に反して闇黒であり停止の時であり、死であり悪であり無てあつた。悪一きものから善き  
ものへの境目である。朝を日々出を、うたひはしても、善きものから悪しきもダメへ境目の日  
暮や落日を意識することだけ避けようとしたであろう。ましてこれを美し、もめとしてうたうこと  
は少なかつたのであろう。

もしもアリスン

その二つは、落日を凝視してこれをうたうひとは、かなり限られた特殊な人であることだ。屈原・曹植・阮籍・陶淵明・謝靈運・鮑照が、ここに落日をうたう詩人であつた。かれらは同じ時代の人々よりもすぐれて、いろいろかゆえに人々と合わず孤独である人たちであつた。前代の文化を最高度におのれの教養としてうけいれながら、その文化が崩壊して新しい時代のくるのを、人より早く見通していく詩人である。かれらは他面、夜をうたう詩人で、落日をうたう詩人に、夜にめざめて実存の暗さ、さうたわねばならぬ人のあつた。落日への凝視は、人間の心情が相当複雑高度なものとならなければ生れない。社会一般が悪とするものの中に善きさぐり、醜とするものに美を見出すことは、デリケイトな感性と尖鋭な知性と、おのれの感性・知性に対する自信がなければ、これをめべこれを使うことはできない。

その三つは、中国で落日をうたわれることにおいて画期的であるのは、陶謝の生きた晉末宋初であることだ。落日をうたう詩人は、二つの時代の境目に生きる人が多かつたが、晉という統一國家がほろんで、いくたの権力者が興廢する南北朝へうつづく動搖と不安にみちたこの時代が、これまでのかぎられた人によってしかうたわれなかつた落日へのまなこを、多くの人々とも聞かせたことである。

その四つは、落日をうたう詩人は、北方山間の人よりも南方水辺の人が多いことである。さきにあげた人々のうち、屈原・陶淵明・謝靈運・鮑照がそうであつた。寒冷の山間では夕日はつるべおとしに沈んで、これをしみじみとしなからむことまはない。渤海に富んだ焼熱の地の夕陽ほど美しくべにしみるものはない。インド洋上の落日をみて自殺する人がやくなないと聞いたこと

がある。超現実的なまでの美しさが、死を甘美なものとおもわせて、金色の海面が人を誘うのであらう。

その五つは晉末宋初の落日詠と淨土信仰との関係についてである。この時代の不安と動搖に立ちた時代の精神にすくいをあたえたものが淨土信仰であつた。当時の最も偉大なその宣教者は廬山の慧遠で、たゞ慧遠は白蓮社を結び淨土の觀法を人々に指導して、たゞ陶淵明は白蓮社には加わらなかつたが、その影響を何らかの形でうけとつていたらうことは吉岡義豊氏の「歸去來」の詩について「中西文學叢書六冊」に説かれるとうりである。謝靈運は慧遠のために説きかゝつてゐるのでその關係は明らかである。淨土の觀法には日想觀や水想觀がある。丁度このころ曇良耶舍が「觀無量身經」を翻訳した。この經の中国撰述説は今日の學会ではほとんど否定できないようである。すなわち偽經である、偽經だけでも、その思想的系譜においてはイートをいし中央アジアにその源流をもつてあらう、ともあれ當時においてはまことの仙經と信じられ、その深い人間性の描寫と美しい文章とによつて人々の心をとらえ、すぐつたのである。この觀經には觀法が十六通りに整理してみへられる。その最初の觀法が日想觀である。慧遠が觀經を見たかどうかは不明だが、この經が中國撰述ならばその内容はすでに中國に存したものと整理したものであるから、慧遠が日想觀をとかうかたとほ考へがたい。たゞ陶淵明も謝靈運も、その昔日をうたう心音には曰想觀を投影させていたのではないいか。なお「大般涅槃經」三十六卷は謝靈運もその解説の事項へ加わつたといわれるが、「聖慧日光、自今永滅、無上法船于斯沈沒」卒後「大仙入涅槃、併日盛於地」、哀慕品などのごとく、佛滅を落日にたくえた表現が隨處に見られるのである。

小川環樹博士は王維か落日を好んでうたうことに、<sup>1</sup> 観經も日だるの影響を指摘された。<sup>2</sup> 告波中國詩人選集6 王維山歌・王維にあつては、多分動かすことのできない説と考えられる。王維にふとくす落日をうたつた李白や杜甫の場合には必ずしも直接の觀空によつて夕日に目をひいたのでではなく、唐の詩人たちがひとしく尊敬し、かれらもまたその影響をこうむつた謝靈運を通じて落日の美を見、それをあらわのしめとしていゝたのではないであろうか。

その六つは、「落日」の諸は、夕日をさす場合に中國でいはしえから用いられたことはではないことである。ふつうに用いられたのは「日暮」であつた。「暮」の字にかわつて「落」の字が直接「日」と結びつくのは、晉の陸機の「日落似有意」がはじめてあり、ついで晉の子安の「落日出前門」してあつた。その後「日落」「落日」のいれをも用いてうたつたのは謝靈運である。陸機も子安も謝靈運も、ともに大江流域に生きた人である。「落」の字がこのよつた使用法は、その地域の方言とかかわりがあつてはなづか。謝靈運の落日をうたう心にはアミタ淨土の幻影ケヤキ、つけられていたのではなかろうか。そして、この新しい幻影をあびた夕陽をうたうには古來の文語に使いならされた「日暮」等の語よりは、かれらの方言の中へ見出した「落日」「日落」の方へ、より生き生きと鮮かなイメージを見たためにこれを使用し、これがまたかれ以後多く文詩人の模倣をみちひいたのではないか。

常建にかぎらう、かれが「観經由」を読んでいたかどつかは、わからない。その家集警見の印象からすると、佛教への関心が儒道へのつなかりよりも深かつたといえないのである。とはいへ

ここにあつかっていゝ詩や西山などの諸篇には、観經十六韻を頭にたいてなされたかと思われう  
よくな構成を感じさせろ面もなしてはない。しかもかれは謝靈運の詩風にふかく学んだ詩人  
と思われるから、観經の影響かたしかめられたとしてし、王維の場合より左直接的なもので  
はなく、間接的なものであつたろう。ここでは落日の美しさが山水清ともすびついていゝところ  
に目をとめておこう。かれの他の詩では、「波上日初露」<sup>2</sup>、「湖畔落日暉」<sup>22</sup>、「落日西山陰」<sup>41</sup>などは  
いずれも同じ八の假きから生れたものと思われる。謝靈運の「江山共鬱眩、雪日相照媚、景夕晝物清、  
對玩咸可憐」<sup>23</sup>、初往新安相廬口、「石淺水深後、日落山照曜」<sup>24</sup>、「落日時嶼收霞斂色」<sup>25</sup>、江妃凱<sup>26</sup>、「日  
隱雲今月照林風、達於今水達猶」<sup>27</sup>、伴舟舟獨などがその類きにかけさしていゝかもしない。

亂流鳴淙淙　乱るる流れけ鳴いて淙淙。

落ちゆくもの、消むものの中にも沈静ならぬものがある。乱るる流れである。落日山水清には壯年から老年につづらうとする人の夕映えのはなしかさとおちつきとか感ぜられうが、それは  
なやかさとひちつきの中にはまた消えぬ若さが生命の流れを乱ししふきをあげるのである。乱流  
だけいつても、やすかに青春の狂瀾怒濤ではなく、淙々とひびく流れである。謝氏の「江南倦體  
憐江北晦周旋、懷新遺転邇、尋異景不延、乱流趨正絕、孤嶼媚中川、雪日相輝映、空水共澄鮮」<sup>28</sup>、登江中孤嶼などはまさに乱流鳴淙々とうとう常建のへと照應する所があつた。餘暇にも「乱流湍大壑、長霧迎  
高林」<sup>29</sup>、日落望江詩の句がええろ。

菖蒲雨地節

菖としの漁は雨に節を抽んで

菖蒲はささの年の暮に枯れた蒲の株をいうのである。そのふうい株が春の雨に芽ぐんですくなくと緑の節をあきんでているのである。先の尖った緑の芽といふのはほどとして人のところに疼くようをなやましさを覚えさせしものである。常連は、その懶としてを解する人尼うたに違いない。生と死との間で菖蒲する人間の運命を無意味をまでに嘲諷した「吉興」竹の中にも「白水明汀洲、流蕩冒深陂」と蒲をうたっている。謝氏の「昏旦变气候、山水含清晖、清晖能娛人、遊子惟忘歸、出谷日尚早、入舟陽已微、林堂斂晦色、雲霞收夕霏、芟荷送映蔚、蒲柳相因依」石壁精舍還湖中作「朝旦發陽崖、景落憩陰峯」石橋水今流、林密蹊絕蹕「初篁苞綠蘚、新蒲含紫茸」於南山往北山經湖中游「謂浦泛沈深、蕩蕩冒清淺」發斤竹洞起荷蓀行などはそれそれに常連が均に投影するものがあるかもしれない。ただ謝氏らは新蒲といふところを常連が旧浦と表現せしにはおれぬところを見のがしてはならぬであろう。これまた実は新蒲なのである。謝氏の表現にはやや型にはまつてところがある。新蒲も自然の中の一自然、すきない。常連の場合、旧浦が妙に生き生きと、自然をこえ~~て~~人間の魂にさそいかける妖精のふうな大たずまいである。

新花水對窗 新しき花は水べに窗に對えり

新花はくれないにさきそめた花である。川へにさいで、雨をさけ、窗によつた作者に対するのであるが、川へ立つ作者に窓の中から見えみかげる美女とも見られるような表現ではないか。「主人山門築、小庭湖中花」<sup>15</sup>の小庭とともに水邊一神女手戴翁玉童<sup>19</sup>の神女とも、ま

定

た「駐舟春涙裏皆顰拜重類、宿寐見神女、金沙鳴珮環」<sup>24</sup>の神女とも思われらるほどにあでやかなくれないと。梁の簡文帝の「採桑樂府」に「細舞重疊長新花壓亂闌」の句があつて素顎をあふう黒髪をやましい寒感にみちた眼差しをあしわせろか、この樂府にうたわれらる一章に当つて飛蝶を望む採桑女の姿が、常建の新花にしほのめかないか。

涙中日已漫 涙の中には日は已に漫りぬ  
雨をさけてひととき足をヒとめた窓へにふと花やぐ夕映えが乱れう流れをさやかせ、旅人は娘達たちに見られていたが、きづくと、涙の中には、日はすでに漫していた。たのしい窓へも旅人には永くすむべき家ではない、

歸鳥多爲雙 帰りゆく鳥は雙ふ、をなすもの多し

足もとの暗くなつた道を歩き出すと、まだ殘照のはのめく空を、かすめるかけ、見上げると、ねぐらに帰る鳥であら、それがみな雙ふをして飛んでゆく。ふうさとを遠く来てとほとほと歩む旅人には、いよいよ孤独のおもしろいをそぞる姿である。常建には「靈心投鳥籠」<sup>25</sup>の句もあつて鳥のそれに対する特殊な思ひをよせていたようである。あるいは、陶淵明の「歸鳥」の詩や、仲霽の好声相和する鳥、「飲酒」の失羣鳥や相守へ還る飛鳥を、このときこじこじにも心にうかへていたやも知れぬ。別の謝氏にも「羈雌憲嵩信迷鷗懷故林」<sup>26</sup> 晚出西射堂が玉つて常建の句の注解となろう。

杉松引直路 杉と松と 直キ路をみちびき

歩き出したと思つと止んだらずみだめろうている旅人を、ひきだてろように、兩側の杉の木  
松の木が、ま、直下道を、さし示し、みちびく。この「杉松」は他奇のないことはありますから、  
ここでは生きいきと働き、杜甫の「古廟杉松集水鶴咏 情古跡よりも読むもののころにひびく。  
「瀘州留別」<sup>18</sup>の「望君本松下」もまたそつたと、わたくしにけ感ぜられる。「引」の字がすばら  
しくきて、つづく直路が閣中の白道のよしてある。「夢太白西峰」<sup>21</sup>の「松峯引天影」は意をこ  
どにして效果は相敵する「引」であろう。

出谷臨前湖 谷を出てて前の湖に臨みぬ

谷中の直路をたどつてゆくと 急に闇が切れた。とみる道は峰で、谷を出 服前には思ひ  
がけぬ湖が 離かな晩景をひろけていた。

洲渚曉色靜 洲と渚とのほどりに曉の色静かなり

「西山」の詩には、「物象歸餘清 林憲今夕麗 席亭碧流暗 日入孤霞繼 洲渚遼陰映 湖雲尚  
明香」の句が入る。これは大江をうたつたものながら、曉色静かな洲渚のさまを想像する資料  
としては充分である。なお、「西山」の「洲渚」は①には「日渚」②には「渚日」とするけれども、「唐  
詩選」につくる「洲渚」がすぐれるようにおしわれ。謝氏に「洲渚既流時」<sup>20</sup>の句がある。

又観花與蒲 又 杉と蒲とを觀る

雄略と曰ふ

新鮮柔媚な麗景をすてて 暗くけわしい直路をとつた旅人が やつと谷をすぎて 平明鏡のこ  
とき湖水の静かな曉色に到達したと ほつと一息つくときには、また見出すのが、すてたつしりの  
新鮮と柔媚とである。岐路悠立そ泣く人の寓喩が、今日なおわれわれの胸をうつのは、人間がつ  
ねに二者擇一をせまうれら実存なうことを道破するためであろう。その人間の無数にてくれず岐  
路のうちにも、壯年より老年へうつる人生の曲り角していくすじにもわかれう道のえうびがアフの  
最たるものは、常達がここに象徴的に描くもののようにも思われる。陶淵明の「停雲」に「東園  
之樹 技條裁榮 載用新好 以招余情」というたゞ、その新好も 常達の觀た「花字薄」も、さう  
どちかゝたものではあるまい。波を垂れながら道へどのみうをえうぶかは、当の旅人にしかきめ  
えない問題であつて、その態状の善惡もまた、旅人の個々の生涯、即してのみいいうることで  
あらかじめ机上にひいた道徳のすぐりきでは どうてい、とらえうるものではない、常達はいか  
なる道をえらぶのか。

入溪後登嶺 溪に入り 復た 横へ登る

やうに曉の溪に入り、また、けわしい横に登るのである。「謙居しに」青苔滿路 流水復  
入林なる句がふえる。まつすぐ見えう道も 目標へ達するまでには、いくたびか、その方向  
をそれ、またもともとろ経過をたどるものである。常達のこころにすえた「復」の一宇には、そのよ  
うな重さが読みとれよう。暗きより暗きみぢにそ入りぬべきことわが中世の一闇秀けうたつた。  
「入溪後登嶺」も相似た心情のたたよが感ぜられる。このうたは、法華經口化城喻品の「從冥

入於冥」を種子として成つたものである。果実たる種子を感じしめぬのは「衆生常苦惱 盲冥無導師 不識苦盡道 不知求解脫 長夜増惡趣 減墮諸天塗 徒冥入於冥 永不聞佛名」をそのまゝの生き方を生涯に営みいた女性が作者たからであろう。常達はかの女とはほろかにことなる。とはいへ、その心情の襞々に 情趣の女性のそれと同い感ひが、一ときだにまぎれなつたことは、いいきれり。解脱を求もうを知つてたちに闇が消滅するものならば サマヤット モームのヨウル、アナトール、ラースのヨタイース四も、ヨリ子春傳いし、いな まあ釋尊の苦行体が成立しなかつたろう。

### 草淺寒流速

草淺くして寒き流れ速し

早春在るがゆえに草淺く、夜へようやく深いかれえに流れ寒く、宿のいよいよ峻すがゆえに、水が速いのであらう。「溪口水石淺」<sup>19</sup>「石瀬清霞文」と、さすさまに溪流をうたひ、謝氏の「石瀬水淺」<sup>20</sup>をあしらわせせる常達ではあるけれども、ここではその句作りの筆純<sup>21</sup>いかがわらず、謝氏の詩にはちよと見られめ微妙に複雑な味わいを醸し出している。草淺はその含む被念がやわらかく明るく、寒流速はつめなく暗い。その明暗が直ちに結びつけられて自然であろうところにその妙あいの原因が工うのであらう。草と流れとが、たたの草と流とのみを指すものでない、ことものはや語を書すまでもない。

圓月明高峯 圓かなう月 高峯に 明し

「はるかに照らせ」と、わが女流の布切に念した山の端の月が、常建にあっては、うつへりのとして、高峯にまどかに海いたのである。今仏得最上 安慈無漏法 我等及天人 無得最大利是故咸稽首 論命無上尊である。月は古今の詩人によて、さまざまにうたわれる。たゞ例文は江淹の「纨扇如圓月 出自機中素」雜体詩にしても、李洞の「一年十二度圓月 十一回圓不在家」文を對月にしても、唐太宗の「照壁蓋圓月 亂珠絛穿雲」書きにしても、それ月たうにすきめ。もとより、月は月ではあれはよく、即物的な人ならば、月か月以外のものであることをいとうかもしだれぬ。だが、これらの月は、実は概念の月であつて、物質の月でもない。さすがに李白の「月下獨酌」にうたわれたものは、観々として羽化する月ではあるか。その攝人法は、歌舞を見るかまえを心得ぬ人は、つくりごとみてみえらかもしだれ。円月逗前浦 孔叢又桜樹<sup>41</sup>西山とウたひ「前溪遇新月 聰取玉琴彈<sup>38</sup>宿玉度浮仙人界道心どうたう常建の月は、概念の月でも物質の月でもない。高峯<sup>42</sup>圓か<sup>43</sup>月は、ことに不思議に、まどかにたましいを照す月である。家集中これに最も近いものは、前溪に遇うた新月たが、この円月は、新月のただよわすなまめかしさを洗脳して、朗然とはるかにてらす月である。常建はあるいはこれを、謝氏の「暝還雲際宿 至此石上月」を門第上宿に學んだのうもしれぬけれども、謝氏のはやはり弄せらるべき月であつて、仰く月ではないであろう。

春山因獨宿 春の山に

団つて 独り宿る

わか身をおくところは 春の山。すでに寒流を去つて、淺くやわらかな草をうぶ毛のようにそ

よかせて いる山肌に宿るうと するのである。花と 薔と にまどわいを 覚えた 詩人のこころは 溪谷の 冷暗に 游われ、円月の 明光にて らされて 静かに、独り、臥すのである。『野鶴抄 王昌龄 采蘋』には、「不然春山隱」の句がみえう。

松陰澄初夜 松の陰に初夜澄めり

夜半から朝にかけてを、松の陰で、さえさえと 澄んでいた。『宿王昌龄隱居』の「松陰露散月清光猶為君」、「崇天師草堂」<sup>引</sup>の「夜深月暫皎」は、このこころに通うものであろう。さきにも引いた謝氏の「石門巖上宿」は、その全篇を、この詩の注釋として 参考することができる。謝氏は、「美人竟不來」となげく。人をいとつて 山水に 徒遊したはずの詩人か、巖上に宿し、この石上の月を弄しながら、人を恋つ。そこに謝氏のぐろあしさが存し、慧遠の門下に 加えられるを得なかつため世人が存するのである。さりとて 初夜に 澄んだ 常達が、往生傳中の 人となつた、といつては ない。詩は ようやく半ばに 刻つたばかりである。

暁色今遠目 暁の色は遠き、目を分ちぬ

いかにまどかであろうとも、月の照すものは、高峯にかざられろ。まわりをとりまくものは、ふかい夜の闇である。いかにさやかに見えようとも、その光は 反映である。その安うさは、瞑想の静けさである。むむりであり、死である。瞑想ねむり 死が 直接的な 生命の喧鬧と眩暈に対するときには、その生命の虚偽性を 言わすして 示す 真実をうことは、もちろんである。虚假

性を捨てた生命が、瞑想、ねむり、死に到つてやむならば、問題はない、だが生命は、なお絶えないのである。いなむろ「旦の瞑想、ねむり、死をへて、生命は眞の人生に入るのである」。常建はとての眞の人生とは何か。瞑想とねむりと死とをふきはらい。月が照し闇が限、たゞ地上の遠望を、晴れやかに見え分つすかたとして呈示してくれるもののは、何か。曙色である。

日出城南隅　日は城の南の隅より出で

やがて、太陽が、生命の地平をのぼる。漢代の採桑女羅敷をうたう「陌上桑」は、「日出東南隅」の句で、はじまる、いかにも生きいきとしたうたである。常建が、かれの「東」をわざかに「城」と改めたのみの句を、ここに選んだのは、その生命感をおのれの日出ノゾウつしたか、たからであろう。けれども、常建は、すでに落日を凝視し、円月を仰いた詩人である。「陌上桑」の單純素朴な原色的风景に満足できるはずがない。初日をうたうにおいても、けつしておろそかなかまなさしき放つてはいけないのである。「清晨入古寺」初日朗高林　竹遲通幽處　海旁花木深　山光悦鳥性　潭影空人心　萬籟此都寂　但餘鐘磬音」<sup>4</sup>　「題破山寺後禪院」というこの詩の、清らかに生き生きとした離謡の、ふしぎな味わいについては、古來どれほどのが説いたかしれないが、なお説きつくしたとはいえない、いみじさである。へんたくしもかつて「磬の音」<sup>5</sup>　朝日新聞一九五八年四月二十二日朝刊の小文に少しく説こうとしたが、その一端をあげたにすぎない。なほのほか、「日出乘釣舟」<sup>25</sup>　「夜寒宿蘆葦　曉色明高林」初日在川上　便澄遊子心」<sup>26</sup>　「日出渭流白」などの句に、それぞれの微妙な日出をうたつていう。

青青媚川陸 青青として川陸に媚びぬ

日は青々として 川にも陸にも媚びて きらきらと輝く。日はきのうの光をなげているにすぎない。川陸もまた キのうと同じく光を浴びて いろにすキない。その日と川陸とに媚を感じるのは 僕想ねむり 死から立ちかえた詩人の初ういしこに感しやすくした生命である。苦行林をすてた釋尊が ます飲んだものからわかい少女の掛け乳瘡であったことを ひくのは 不倫めそしりをすめかれまいが、一脈相承するものが存するようへ感ぜられ。常建が ここに 媚の字を用いることとはばかりなかつたのは、旧蒲新詔に見た惑わしさをすでに洗脱して、ここには感しなかつたからであろう。謝氏の「孤嶼媚中川」とはその邊をことにする。とはいえ 媚ばすをわち媚てある。

亂花曇東郭 亂花 康郭さ匂い

乱れさく花か東へ村郭をあおうのである

碧氣銷長林 碧氣 長林を銷す

みどりのかすみがたなびいて 大きな林をかくすのである。

四郊一清影 四郊は一つの清らなる影

城市も 川陸も 亂花も 碧氣も、東郭も、長林も、それら四方のすべては、紺媚たら生命の

誦歌をひびかせつゝ、一つの清うかなすがたとなつて、眼前にある。

千里歸寸心 千里 寸心に歸しぬ

そうして、さまで、まなみちすしをふくんだ、遍至の千里は いまかえりみれば、方寸の心の旅路であつた。謝氏にも「此別既久無適 上留田 寸心畢竟在萬里 上留田 尺素遺此千夕 上留田上留田の句かみえ矣」

前略王程復 前に王程の候がすき勝れども

人は、瞑想のうちにあるとき、束縛とはなれて、その魂は自由に高く駆けりうる。瞑想をやふて、生命の地上にかえろとき、たちまち、現実は、ひととぞ束縛しようとする。王程とは、任務をはたすために与えられた時間である。詩人の前には、その行動を律する権力と時間とかせます、出發を假すのである。出發とは何か。自由を捨てて束縛の中へ帰ることにほかならない。夢想の世界から行為の世界へと立ち帰ることである。人は、その生命をたたないかぎり、全き夢想の中に住むことはできない。生きていうかぎり、実際的行為が人を貪して死に至るまでの道すじを這つたてろ。実際的行為の世界は、対立抗争にみちた世界である。

却思雲門深 却つて雲門の深きをモ恋つ

さればこそ、夢想の世界の雲門の深さが、いよいよ恋おしく、立ち去りがたいのである。

だがい、たん高峯をてうす四月を仰いた詩人は、ふたたひ行場の世事に帰つたとしても、現実をながめる目は、おのずから異なる。

雪門にいたる以前のかれにとつては、道は「ねに抜一をせまる岐路であつた。夢想と實際行為を前にし、夢想を恋いつつ實際行為を避けたのである。夢想と實際行為とは相矛盾する。以前のかれは、矛盾をきらして、「よく夢想の純粹を求めたのであつた。こんなちめかれは、その矛盾を、よみかえた生命のかがやきに照しつつ、最後の旅路を歩むのである。」

以前のかれがもとめた全き夢想の純粹は、恐らく死においてなければ、求めえまい。死は甘く安らかである。生は苦く動搖にみちている。詩人は、甘く安らかな死をすてて、動搖にみちたにがい生を選んだ。死をすてた詩人にも、やがて死は追いつくであろう。しかし、寺えられたいのちのかぎりをじつくりと生きてゆこうとするものである。生きようと/orするものは、死のうとするものよりも弱いものである。詩人は、おえてその弱さを選んだ。生きようと/orするものは、その弱さを大切に、守りながら歩まねばならぬ。詩人は、生きようと決意し、おかれのものとなつたこの弱さを素直にみとめ、生きるためのさまさまな矛盾を、ゆくさきのおれのうたの基礎として進んでゆくのである。「乱花覆東郭 碧氣銷長林」はそのうたの主題であつた、かつて矛盾を感じたものの中にはこそ眞の人生がひらけてゆぐのである。「田郊一清影 千里歸寸心」とは、この境涯をさすのであろう。

やがて旅路は終りに近づく。日ははてようとして余興はつきないのである。

到家彈玉琴　家に到つて玉琴を彈む

旅を終えて家に到つた詩人は、長い旅の結びを、落日のあなたの淨土に求めるわけでもなく、此岸の旧蒲新祐にもとめるのもなく、冷々たる玉琴にそのフィナーレを弾奏するのである。

「江上調玉琴　一絃清一心」、「君去芳並綠　西客彈玉琴」、「前溪遇新月　聊取玉琴彈」、常建はしばしば玉琴をうたう。玉琴とは何か、藝術にとつての藝術がそれであろう。人生の不可思議をさぐるため、ひとはさまざまの方法をもつ。詩人にヒントでは詩、樂人にヒントでは樂である。往生伝中の人ならば、念佛によつて極樂に生れることを、やめ究竟とするであろう。詩人もまた念佛し淨土に生れることはあろう。けれども、念佛するために詩を捨てるならば、かれはすでに妙好人へ転化したのであって、もはや詩人ではない。

詩人は詩によつておのれの往生をなくとけるほかに道はない。ダンテが設定した詩人のゆくさきは煉獄であつた。淨土は、詩人には無縁なのであろうか。煉獄に住むには、常建の玉琴はあまりにも清らに聞える。どうしたことであらう。かれもまたしばしば天上世界を思ったふうことは「仙谷遇毛女」等の詩のあろによつて知られる。かれが仙去したことは、奇を好んだ唐代の伝記者たちも伝えてはいないのである。いつたゞ、円光につつまれて此土を去らねば淨土は現成しないのであらうか。また念佛によらなければ淨土は無縁なのであらうか。そもそも詩人が詩をつくり樂人が樂を奏することが念佛であつてはいけないのか。仏經のうちに、現に幾多の偈文がふくまれる。偶は歌をしてする念佛ではないのか。もしも仏がキリスト教にいう神のごときものならば、あるいは自然をうたう詩は、念佛とはなりえまい。たゞ諸法實相を教える世間では、山川

きうたゝ草木を描くこともまた、念仏たりうるであろう。常建の往生すべき淨土は、天上でも泉下でもなく、この現実の世で五つたのであらう。されば詩人であるから、實際行為の世界に住んで、實際行為の奴僕となるべたのではなく、矛盾にみちた現世を詩歌の淨土に化成したのであらう。裝婆即寂光がうれの玉琴を鳴りひびかせた調べででしもつたろうか。

(一九五九三二七一九六〇ハ一ハ)

## 七

「白湖寺後溪宿雪門」は常建のBildungsromaneである。詩を解するに、作者の精神の進歩を知ることが無意味でないならば、常建の詩を読むためにこの一篇を逸することができないと考えられる。唐詩を送ふ集は歷朝に少くないが、この詩を送ふものは、管見の及ぶところでは、文苑英華があるのみである。なぜであろうか。

最も早く常建を認めてその作を採るに寛てあつた河岳英靈集は、「昭君墓」、「弔王將軍墓」<sup>3</sup>、「題破山寺禪院」<sup>4</sup>、「宿王昌齡隱居」<sup>5</sup>、「送李十一尉臨溪」<sup>6</sup>、「江上琴興」<sup>12</sup>、「閑齋臥病」<sup>14</sup>、「仙谷遇毛女」<sup>19</sup>、「夢太白西峯」<sup>21</sup>、「郢渚招王昌齡張儀」<sup>22</sup>、「春詞」<sup>23</sup>、「張公子行」<sup>25</sup>、「晦日馬鐘曲」<sup>26</sup>を送ぶ。わが国で最も広く流布した唐詩選は、「西山」<sup>41</sup>、「破山寺後禪院」<sup>4</sup>、「寒下曲」<sup>34</sup>、「送宇文六」<sup>10</sup>、「三日尋李九莊」<sup>33</sup>を送ぶ。前者の送詩をつぶさに見れば、常建の精神の癡狂し、その志向も、ほほ明らかに見遁すことができる。まことにかれの魂にとつての知者といえよう。後者もまた、「西山」と「破

# の全貌

「山寺」ときあわせて読めば、「白湖寺」の全篇をほほ易解することができる。殊に「西山」は結構、おいて「白湖寺」に崩る相似し、情成の緊密は閑然するところがない。また「破山寺」は突然たる別天地を地上に建立したかのようて、一字もぬきさしなうぬ珍たる白玉である。俗本とけなされながら、常建に関しては、中々適切高雅な選み方をしたものである。けれども、兩者とも、常建の過歴の推移の微妙はからずもしも知りやしない。

常建は思索的な詩人である。一つの問題を深くひとすじに追求する詩人である。かれの多くの家集に同じテーマかいぐたびらわれるのは、その証しひ一つである。時流の好みに投する新体の詩の少いことは、その二つである。とりわけ題材の広くないのが、その三つである。かれの詩が一部の批評家に高く評価されながら、同時代の他の詩人のごとくに流行しなかったのは、この三点だふかくかかるように思われる。すなわち、革調でとつつきにくいと感せられたのであろう。

送集をつくるとは、いわは一つの流行を育成する企てである。すなわち、人の目をいくことをその手段とせざるを要す。基調において俗とことなることは、旗幟を鮮明にする所以であろう。前の中に変化に富むことは威を示すゆえんである。すれば多くの送集が、革調でとつつきにくく感せられ、長篇の一首によりは、セリリとわざびのきいた短章数首に手をさしのべる人は、自然であろう。そのようを編者は「白湖寺」に重複と冗漫とを感じたかもそれれ。恐らく「西山」とみくらべて、オ十六句以後は蛇足としたことであろう。けれどもこの説がけつして重複冗漫の病を犯したものではなく、第十六句以後にむしろ題目のみ存することは、さきの説明で了解せられ

るであろう。

形式の簡淨を捨てても精神發展のレアルをあくまで追求しようとしたものがこの詩である。ヨ文茨英華はこの詩を選んだ兒謡の幽深をたたえられてよい。

ヨ文茨英華の後へ出て、常建を深くこよやかに味識したものは、明の胡應麟の『詩數』である。

古詩の転轍は殊に多きも 大要は二格に過ぎず。(中略) 高閒、曠逸、清遠、玄妙をもって宗とするものあり、六朝には則ち陶、唐には則ち王、孟、常、儲、韋、柳、白等卷ニ

常建は謝靈運にもっとも深く傾倒したひとではあるが、陶淵明と同格の玄妙詩をつくる人とする胡氏の説けみたりしたものではない。「仙谷遇毛女」が陶氏になら、たものであることはすでに述べた。「白湖寺」や「破山寺」のように、一見なんのかかわりのない作においても、別天地が狹隘幽暗の小徑をくぐって豁然とひうける妄想は明らかに桃花源に同じいものである。この妄想には母胎を故郷として別天地とし、歸處とする男性の深層意識とつながるものがある。この二つはかくれた意識はいずれの人の表現にも、しらずしらずのうちにまじりうちであろうがこれを高い藝術作品に結晶させた点では陶氏の桃花源はたぐいそれをもつてよいであろう。常建もまたそのエロースを極めて幽玄な作品に昇華する。陶氏に学ぶところが深かつたからで

・あらう。『幽玄』といえど、胡氏にもその評語がある。

常建の語は極めて幽玄なり。これを読みは人をして塵表に出するかくくなしむ。しかれどもこれを見ぐれば鬼語なり。

過ぎて鬼語となるところのものか。その境をふみ出さぬとしても、すでに鬼なるものである。ともに幽玄の句をねつてし陶氏は過ぎてなお鬼語を出ださないであらう。兩者をわかつ境界してこのあたりにひかれるのである。

靖節は清にして遠、康樂は清にして麗。(中略) 常建は清にして醇。

胡氏の品鷗は、鮮烈新穎で、理路において整然たるものある。僻より鬼へ正に一步である。すなわち

常建已に李賀を聞く。

といふゆえんであらう。でいかなるものが李賀へのみちを向くのか。

殷璠の詩選は、常建を以て第一となせり。中略 常は幽深際なし。中略 常の「戰餘落日美  
軍敗鼓聲死。今與山鬼鄰。殘兵哭遼水」は、<sup>是</sup>絶に是れ長吉の祖。

この詩のみが李賀をひいたのでは、もとよりない。また常建の詩境は李賀にのみひらかれ  
たのでないことも、いふまでもない。「晦日馬鎧曲」などは、たぶん「人日登高」などの韓愈の  
詩境に因をひいたものといつてよいであらう。

いすれんしても、中國詩史上の狂い嘆きといわれる李賀の詩のために、その幽徑をひらく先覚  
を常建詩に見出した胡氏の眼の鋭さは、古今の詩に爲、批評家の間で、大くいまれたものであ  
った。

兩者の親近性を例示することはもつかしいことでない。けれども詩林を彷徨して常建と李賀  
とに逢着した人々たうべ、胡氏の一茶ノよつて完全默契されうてあらう。みずから兩者を見出さ  
ず、胡氏のことはいたちうなすこゝさめ人々には恐く説いてたゞ理解せられることなかた  
いのではなかろうか。  
<sup>たゞ</sup>

常建は、孤独の相貌を帶びた詩人であった。けれども、生前には王昌齡などの良い友をもち、  
死後には殷璠なし、胡應麟などのすぐれた理解者をもつた。千年を経て、その三四の作があつたの  
人へ愛護せられる。殷璠は「一尉い論も。玄玉悲しいかた」といふ。むしろ辛酸を詩人とい  
うことかでさようか

四 方 向 八 古 遺 記

四 方 向 八 古 遺 記 の 「腹況雜記」、「袁中郎私記」に対し 諸家より贈る御教示を得た。左に記して深く感謝する。

○ 小林太市郎氏 一九五八年九月二十九日付

大典禪師の唐詩解題に、「故園黃葉滿青苔夢後即故園城頭曉雨哀曉夢即角」と云い、更に「思歸二字見于題而藏于詩有旨哉」と説き、そして唐詩集註に謝朓の「故心人不見」を引いているのは深く責意に稱うものと思われます。「憶故園」の「故園比去千絲里春夢猶能夜夜歸」二句もまた遺論の確かさを明證しております。猶封氏閑見錄四卷五に

大翌中吳士姓頴以畫山水擅振諸侯之門每畫先帖絹數十幅于地乃研墨汁及調諸采色各貯一器使數十人吹角十餘面取墨汁灌寫于絹上。然後以筆墨隨勢開決屬峯密島嶼之狀夫畫者僅種之事

今顏子瞑目鼓琴有口戰之象其畫之妙者乎

という學士姓頴はどつて額況山一く思われます。この文は四類說四卷六にも引いていますか、サし異同があります。また四歷代名畫記曰王默の條には潰墨の狂畫を得意とした王默（即ち王墨）に額著作が新亭に於て畫を学んだことを記しますが、これから思うとやはり狂畫の吳士姓頴が額況なること治と察いを容れず、後の天の邪魔的性癖が愈々現れて面白いことです。尤も張考志は筆意を尚んで潰墨を廢す立場ですから、それで況の「畫評」を殊に善く言わないのでしょうか。

○ 小川環樹氏 一九五八年十月四日付

袁中郎私記三と對讀して、ろうに、詩のよみ方について色々疑問を感じましたものを、左方へ書き陳ね 御商量を乞いたく思ひます。

83 夏末より五行 鴉鳴燕語等閑度 閑カに度リ 带闇ハ「ウカウカ」ノ義デスカラ、旧訓ノ「ナオサリ」テヨイタロウト思イマス。

84 夏一行 少年借客章台路 客に借る 未詳、何カ原本ノ漢字ガアルノデシヨウ。

85 夏八行 陽台洛水夢空長 夢と空とのじぞく長きに コレハ訛シ過ギシヨウ・夢ムナシク長

シ・トフ・ソウニ訓ズベキ处。

86 夏三行 梁王台館空山丘 山丘に空し カク訛セヌコトハアリマスマイカ、原義ハ「空シク山丘ヘアリ」テ 微シク累ナルト思イマス。求三行 楚國非無寶。荆山空有哀。君看白雲陽春謂。千載還持作賦才。句讀ニ注意。白雪ハ多今白雪ノ誤字。

88 夏末より五行 竹樹陰森可一夜 一夜可なりコノ可ハ「恰カモレマタハ」ト解ルレト解スベキコト、張相ノ詩詞語訛渾訛ニ云ウトナリテス。

93 夏末行 湖山勝有情本まして情あり 腹ハ助字デ大ヘン訛シ難イノデスクヘヤハリ張相ノ素參照 蔡氏ノ説モ必ズシモ從イ難イモノアリマス。ココハマズ「ナオ」トテモ訓ミウルト思イマス。

95 夏二行 杜自頃拾葉 自らを擧げて 杜モ助字、現代語ノ「モ」ニ近ク「ムナシク」ヘヌハイタス ラニ・ミスカラ」ト訓ズベキ处。

究

108 行末より三行 花雨無多亦溶渠 多きも亦渠に溜るなし ハ無理、カヨウナ諸ミ方ハ韻文ト散  
ノ別無ク、マズ成立シ得ヌト思イマス。『花雨多ナナモ マタ渠ニ溜ス』ニ造イアリマセシ。  
（中略）頬洗め「曉角思歸」の（中略）「人不見」を夢中（又は意中）の人とする御説には（中  
略）轉湘てしたか（曲終人不見 江上数章青）の名句が、その旁証になるでしょう。

○森山龍平氏 一九五八年九月十七日付

口 公安縣志 卷之六の人物傳に「袁宗道字伯修号石浦 曾祖瑛以任使聞 祖大化彬惟爲退讓君  
子云云し お父は号が七次で名は士瑜です・

森山氏け右示教の上 更に口公安縣志の閲覧を許された。感謝いたえない。なお 金田純一  
郎氏からは14 15頁の曉の注音の誤記口口口口口。と26頁の李亨レ李亨とを示教せられた。

清 阮葵生撰口茶餘客話 卷十二「妻之稱謂」の條によると六朝時代の方言で妻のことを「鄉  
里」と稱した上である。されば「曉角思歸」の故園が人不見の人であり、その人が妻である  
とする推定は 余すり無理ではないであろう。阮氏の記事は左の通りである。

邦君之妻 古人稱矣 不知夫人何以稱邦君也 士庶夫婦 遠呼近稱 范無可謂 或借兒女  
或用其鄉語謹習 甚非居家之禮（中略）沈休文詩云 還家問鄉里 誓堪持作夫 郡里 妻也  
南史張虎云 我不忍鄉里遠他必 六朝時方言耳 張曲江感遇詩 余幼即鄉里 似即鄉里意

集田憲雄詩集『無花果』序 (一九六〇年二月方向社発行) 正誤

正

無花果

闊

無花果  
誤

闊

14

32

70

2 页

52

方  
向  
正  
誤

1951

1944年～1959年

1951

1954年～1959年

104 页  
行

正

誤

胡氏のことはにちあうな  
すこゝとせめ人々には

胡氏のことばにちあうな  
すこゝとせめ人々には

出版目録

冰中新城*	後然草の成立に関する研究—兼好の伝記	著者証を中心として—	
*志樹透馬*	志樹透馬詩集	詩集	
*原田憲雄*	曲夜嶋平松無花果の骨に	中国詩選集 詩歌中國詩選集	
*原田千美*	桃葉集	歌集	
*原田禹雄*	論文集工體外路	医学研究集 歌	
方 向 1~9		雜誌	

方 向

1960年8月29日發行

方 向 社

京都市西陣局之内下長者  
町通千本西入端島町 374

¥200